

季刊

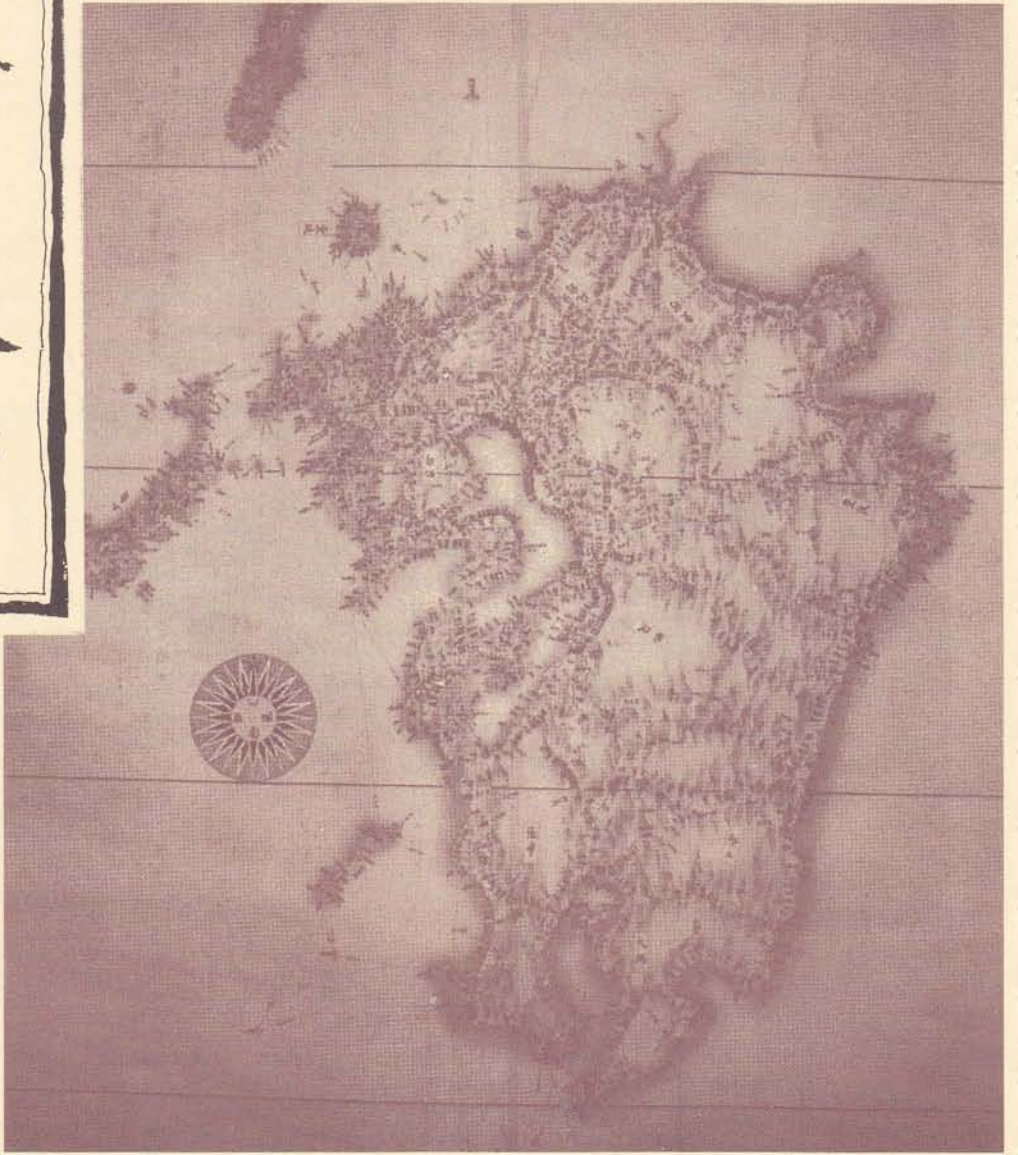
史料と伊能図

一九九六年秋季号

伊能忠敬

研究

「伊能図探究」継承 第九号



伊能忠敬研究会

表紙図解説（松浦史料博物館蔵 伊能小図）

最終版伊能小図の針穴本は一つもなくなってしまうのかと思っ
ていたら、九州だけの部分が平戸の松浦史料博物館にあることがわ
かった。忠敬に地図を造って貰う約束があったが、亡くなったので、
弟子の保木敬蔵が引き継いで扱い、高橋景保から渡されたと添え書
きがある。

引き渡し時期は文政五年で、最終版上呈直後である。伊能隊製作
の日本図は非公開であったため、正式には諸侯等に渡すことはでき
なかった。内々にということらしく、地図受け渡しの記録はこれま
で、見たことがなかったが、松浦史料博物館には伊能図と共に文書
が残っている。

地図は九州部分だけであるが、仕上げは大麥丁寧に描かれたもので、彩色
はやや淡彩、文字は達筆、最終版小図の写本に見られる合い印等描
図の特徴は皆揃っている。贈呈用で他図と接続しないため、接合記
号はなく、方位を示すためコンパスローズが一個あるだけである。
針穴は鮮明である。伊能グループにより、文政五年に造られたこと
が明白な小図として大変貴重である。

藩領ならびに長崎付近までの大図と瀬戸内から長崎までの中図に
よる海路図等七舗とともに所蔵されている。（渡辺）

（題字は忠敬の筆跡）

目次

（表紙写真解説） 目次

報告

伊能忠敬の測量法

測量日記の活字化について

伊能忠敬 Q & A

忠敬交友録

忠敬の測った富士山の高さ

小松藩の松茸

第一回例会に参加して

四千万歩も一歩から

現在に生きている伊能忠敬

史料紹介

伊能家（世田谷）文書紹介

坂部貞兵衛の書簡（二）

箱田良助の誓約書

伊能測量の地域史料

挙母城下の大庄屋鈴村家の記録（二）

諸侯の依頼による地図仕立て

連載 第六次測量日記（三）

伊能図探究 九

松浦史料博物館の大・中・小図

長崎市立博物館の諸図

入会案内・投稿規定・編集後記

藤岡 健夫 1

渡辺 孝雄 3

編集部 7

佐久間達夫 8

伊藤 栄子 8

前田 幸子 9

豊島 正 10

安藤由紀子 11

伊能 陽子 15

編集部 18

渡辺 一郎 21

佐久間達夫 24

伊能日本図探究会 28

編集部

伊能忠敬の測量法

藤岡 健夫

大谷亮吉氏の名著「伊能忠敬」の中に忠敬が用いた測量法について述べられたところがある。この部分を要約すると、忠敬が測量に採用した方法は、今日測量に用いられる三角測量ではなくて、古くよりおこなわれていた「導線法」によって海岸線及び街道筋を実測していたのである。

忠敬の測量法が従来の測量法に比べて、面目を新にした主要点とも云うべきものは、

一、当時一般に使われていた「遠山仮目的（えんざんかきりめあて）の法」を数多く利用して、測量誤差の是正につとめたこと。

二、当時わが国の測量学者が、机上の空論に止めていた各地点の天体測量を実行して、広い地域についての測量誤差の補正をしたこと。

三、測量器械を改善し、またその使用にあたって周到な注意をして測量の精度をいちじるしく増進したこと。

以上が、それ迄出来なかった広い区域の測量を忠敬が遂行して、日本輿地図を完成することが出来た要因であると述べている。

導線法は、当時田畑の検地や、城下町の測量に使われていた。忠敬の高弟渡辺慎が書き残した測量法の中から導線法の部分を、要約してみる。

「街道、海岸や、島などの形状を測量するには、先ず初番の杭をうち、（図1）ここから屈曲にそって順次杭を打ち、ここに梵天（図2）祭礼に使う梵天に似ているところからこの名がついた）を立て、この間

の距離と方角を測って行く。距離測定には間縄又は鉄鎖を使い、方角測定には小方位盤（図3）杖の先に付けて測定できるので杖先羅鍼ともいう）を使う。このとき精度を上げるために方位盤は、二台を使用して両方向から測定する。この値は札に書いておき、更に野帳に記入し、毎日測量が終わった時点で、読み合わせて誤りを防ぐ。更にこの野帳には、国、郡、村境や、田畑、山川の模様も記入して、地図作成の資料とする」

以上のような内容である。

この導線法は、今はトラバース法と称されて、小範囲の測量に日常使われている。先の梵天は、道路測量などでよく見かける赤白に塗ったボールのことであり、間縄は巻尺、小方位盤は、測量技師が三脚に据えて覗いているコンパス、或はトランシットにあたる。現場で測定値を書き込む記録帳は、今も野帳と呼ばれている。

海岸線の岬は、普通断崖で、測量が困難な所が多い。このようなき忠敬は、横切測量と称する方法をとり、岬の手前で山を越え、測量の正確さを期した。（図4）山を越えるときは、当然その距離に傾斜角 θ の余弦（ $\cos \theta$ ）を乗じて平坦距離を求めた。その上で岬を廻って測量した。このようにすれば、たとえ岬の測量に誤差が入っても全体として誤差は防げる。間縄で直接測量の困難な離島までの距離や、川幅は、三角関数表を使って測量をした。忠敬は、大局を正しくつかむという観点から、これらの測量法を臨機応変にとりいれた。

導線法は、起点から始めて次々と測量を重ねて行く。従って、長い距離にわたって方角と、距離の測定を何百回、何千回と続けて行くと、誤差が重なって、実際とかけ離れた結果になりやすい。これを防いだのが次に云う遠山仮目的（図5）である。

これは、複数の観測点から、遠くに見える山の頂きの方角を測量し

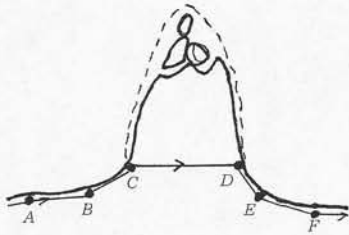


図4 横切測量法



図3 小方位盤
(大谷、伊能忠敬より)



図2 梵天

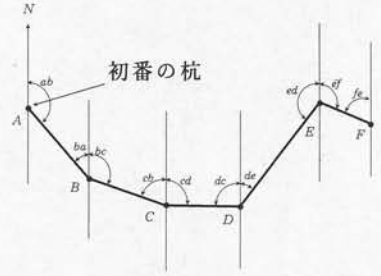


図1 導線法

て、観測点の位置の補正を行ったのである。忠敬の作った地図には、山の頂きから何本かの赤い線が放射状に引かれている。これが遠山仮目的に測定した線である。富士山は、格好な目標物で、中図では三十七本以上の方位線が入っており、遠いところでは、栃木県の矢板付近からも伸びている。空気の澄んでいた当時は、今と違って富士山を観測できる機会も多かったと思う。

方位線の入った地図は、忠敬図の特色で、一見して忠敬図だとわかり、また地図に一種の美しさと、信頼感を与えている。この遠山仮目的の法は、現在交会法と称し、測量教習書にも記されている。

導線法の誤差を交会法で補正していても、江戸から東北地方や、九州方面へと遠く離れてゆくと、また誤差が増えて行く。これを防いだのが次の天体測量で、緯度と、経度を測って補正を加えていった。忠敬は測量中、宿に入ってから、どんなに疲れていても、晴れているかぎり、星の観測を欠かさなかったという。緯度は北極星の高度測定で求められるが、経度は正確な時計(クロノメータ)が無かった当時極めて困難であった。従って、忠敬の地図は、中央から離れた北海道

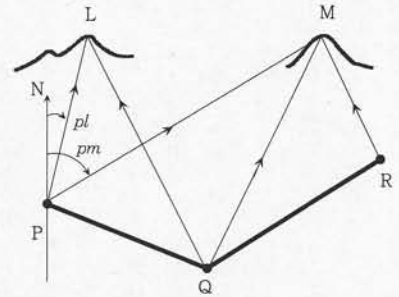


図5 交会法

や、九州地方において東西方向の誤差が目立つ。

忠敬は測量するとき、絶えず先頭に立ち、自ら方位盤を覗き、心を落ちつけ、細心の注意を払って測定値を読み取ったという。それだからこそ、今から見ると初歩的な当時の測量器械で、精度の高い地図が出来たのである。忠敬の読み取った数値は、後に控える弟子によって野帳に書き込まれ、これを元にして大図の場合は、一丁を一分(三・〇三ミリ)一里を三寸六分として下図を作り、弟子たちの共同作業で地図(絵図)を書き上げて行ったのである。(中図はこの六分の一、小図は十二分の一)これらの中には、絵師もいたし、細字の上手な女性もいたという。従ってこの野帳があれば、後は何枚でも同じものが作れたのである。忠敬地図の真価は、角度と距離の書き込まれたこの野帳にあると思う。しかし、これらの野帳は、地図完成後ほとんど反古などにされて散逸し、今残念ながら僅か断片的に残るのみである。忠敬が使用した測量器械については、また機会があれば、改めて述べたいと思う。最後に、現代の測量法について、簡単に記す。

三角測量 一定の基線から、次々を三角形を作り、その角度を測りながら、つなぎ合わせて全国をカバーする測量法である。明治以後、陸軍の参謀本部がこれにより、日本全国の地図を作り上げた。我々に馴染みの深い国土地理院発行の五分の一の地図の元は、これである。

その他の測量 昭和に入り航空写真が利用されるようになり、さらにコンピュータの発達と合わせて、測量法や、地図の作成法も大幅に変わってきた。その上最近は人工衛星によるきわめて精度の高い、全地球測位システムが、整備されつつあり、三角測量も色あせてきた。

距離の測定については、電波や、レーザー光線を使って極めて正確に、簡単に測れるようになった。

(ふじおか たけを・元日立製作所勤務・技術士)

測量日記の活字化について

渡辺 孝雄

はじめに

「伊能忠敬測量日記解題」(『伊能忠敬研究』第七号所収)では、佐原市伊能忠敬記念館所蔵の二つの測量日記について、概観したが、ここではこの測量日記がどんな形で活字化されてきたかをみてみたい。伊能忠敬の測量日記は、測量の経過を知る記録としてのみならず、通過した地域の江戸時代後期の資料としても価値がある。

特に、初期の「忠敬先生日記」には、通過した道筋の村々の村高・家数・人数・支配などについてかなり詳しい記事がある。この測量日記を地元の史料として活用しようとした例はこれまでにかなりあった。これまでに県単位で活字化された測量日記は、「表1」の通りである。千葉県では地元ということもあり、昭和五年から測量日記の活字化を進めているが、戦前では福岡県(昭和七)・青森県(昭和八)・福井県(昭和十一年)・大分県(昭和十四)等で、それぞれの県部分の日記の活字化が行われた。これらはいずれも「測量日記」(二八冊)からの活字化であり、大須賀初男「伊能忠敬の愛知県下測量」(No.10)のみが、「忠敬先生日記 九」の先触れ(愛知県分)を活字化している。

戦後の県史の刊行のなかで、本格的に伊能忠敬の測量を取り上げたのは、愛媛県史である。伊能忠敬の測量日記だけでなく、県内所在の測量関係史料を収録している(『愛媛県史 資料編 近世下』昭和六三)。

史料収集についての思い出

最後にこれらの日記の活字化に際しての、当事者の史料収集の苦勞をコメントとして付け加えた。いずれも戦前に佐原の伊能家を訪れ、測量日記を筆写した体験を語ったもので、当時はまだ写真が一般化していなかった時代の苦勞が偲ばれる。私自身各種の史料調査に携わる経験から、これらの短い記述のなかに、それぞれの筆者の思いが込められていると感じたからである。次の三例を紹介する。なおNo.の数字は〔表一〕の通し番号を示している。

① 石橋重吉「伊能忠敬越前測量に関する沿海日記」(No.4、福井県)

風薫る五月十八日、豫て依頼して置いた伊能忠敬先生の沿海日記を見るべく東京から千葉県香取郡佐原町本橋元の伊能三郎右衛門邸を訪問した。主人は大病の為、遺著・遺物の拝見は絶対に謝絶しておられたが、東大教授医学博士竹内松次郎君から同町医学博士安達昌平氏宛の紹介状と同氏夫人の案内で、伊能家秘蔵の享和三年沿海日記上下二巻を拝見する事を得た。越前海岸測量の分は十二行野紙丸九枚半、これを写すや否やにつき一寸躊躇したが、直ちに決心して用意した手帖に鉛筆を走らせ大急ぎで原寸のまゝ写しかけた。三分二ほど写した頃には大分疲勞を感じたので、用意の仁丹を三度飲んで漸く気分蘇生し、約四時間半かかって写了り、厚く主婦に感謝し、帰途香取宮に参拝して夕方帰京した。

② 吉田祥朔「伊能翁防長測量日記」(No.13、山口県)

本書ハ昭和十五年ノ夏、余在京ノ学友工藤康海氏ト共ニ伊能家ヲ北総佐原ニ訪ヒテ、同家所蔵ノ忠敬翁遺物ヲ展観シタル際、請フテ其ノ測量日記ヨリ防長兩國ノ部分ヲ抄録シタルモノナリ、憾ムラクハ当時逆旅倉卒ノ間ニテ、写後之レガ校合ヲ遂グル能ハザリシコトヲ、困ッ

テ他日更ニ之レヲ原本ト对照スル機会アランコトヲ庶幾フト爾云。

昭和二十年乙酉冬至前一日於周防田盧邑樸村精舎南軒下 吉田祥朔記

③ 森平太郎「伊能忠敬九州測量日記 大分県の部」(No.18、大分県)

私は伊能忠敬先生が、齢五十にして始めて高橋東岡先生に就き、天文測量の学を習ひ五十六にして全国測量の仕事を始め、十有八年営々として老を忘れ、遂に地図の上にして俯して逝かれた悲壮なる御生涯を思ひ、その沿海測量日記の一部を読み、我が大分県下は如何なる順序で亦どんな模様であつたかを調べたいと想ふたが、一向文献も見当たらず、その中福岡県史資料には同県下の日記が収められ、東北地方や関東の一部は房総文庫その他で発表せられたけれど、遂に我が大分県の分は判らなかつた。(中略) その中、私の旧友で水戸のいばらぎ新聞の主筆をしている石松夢人君に手紙を出して、伊能家に交渉を頼み遂にその承諾を得、昨年末から石松君はしばしば佐原町に出張して同家秘蔵の原本に就いて謄写を続け、漸く今回完成した、(緒言) 私が石松夢人君に依頼して千葉県佐原町の伊能家に交渉し、昭和十三年十一月末から約十五日計り滞在して、全二十八冊の日記を調べ、大分県関係の分として、文化七年正月二十二日より十二月までと、同八年に亘りての記録を写したのであるが、(中略) 石松君が謄写した時は秘庫から出された日記を大きな座敷で机の上に列べて調べたりしておる間は、側に老婦人が敷物もみかず端座して控へられたのには恐縮したとの事である。(昭和十四年三月二十日)

〔表1〕活字化された測量日記一覽

(県単位。カッコ内の年月日は活字化された日記部分を示す)

- 青森県1 「伊能忠敬 測量日記抄」(『新編青森県叢書 第四編』青森県立図書館、昭和8年)
 (寛政12・5・6・5・19 / 9・17・9・28 / 享和1・10・10・11・12 / 享和2・8・7・8・27)
- 岩手県2 鼻節重治「岩手県に関する伊能先生の測量日記」(孔版)
 (寛政12・9・28・10・5 / 享和1・11・7・11・20 / 岩手県分全部が収録されておらず、それぞれ帰路部分のみである)
- 秋田県3 上法香苗「伊能忠敬の秋田地方測量日記」(『出羽路』25、昭和40年)(No.6『房総文庫 3』所収の秋田県分を抜出す)
- 福井県4 石橋重吉「伊能忠敬越前測量に関する沿海日記」
 (市立福井図書館、昭和11年)(享和3・5・26・6・24)
- 千葉県5 「伊能忠敬測量日記」(伊能登「伊能忠敬 附測量日記」所収、明治44年)(寛政12・4・19・10・28 / 寛政13・1・5・2・17)
- 6 「伊能忠敬測量日誌」(『房総文庫』1-3 所収、昭和5-6年)(寛政12閏4・19・享和2・6・11、測量日記28冊の内、最初の5冊を全文活字化)
- 7 「房総沿海測量日記」(孔版)(『房総郷土研究』71-72号、昭和12年)(享和1・6・18・7・27)
- 8 「文化六己巳年 江戸日記」(孔版)(『房総郷土研究』56、62号、昭和13年)(文化6・1・20・8・26「忠敬先生日記 二一十四」の一部)
- 9 「測量日記抄」(『房総叢書』第8巻 所収、昭和15年)
- 愛知県10 大須賀初男「伊能忠敬の愛知県下測量」(『愛知大学総合郷土研究紀要』22、昭和52年)(享和3・3・27・4・11の先触れ)
- 11 大須賀初男「伊能忠敬 尾三測量日記」(愛知県郷土資料刊行会、昭和56年)
 (享和3・3・27・5・15 / 文化2・3・26・4・9 / 文化5・2・12・2・17 / 文化8・3・19・4・10、測量日記28冊本から尾張・三河地域の部分と関連した泊り触れを収録)
- 鳥取県12 遠藤二郎「重要文化財伊能氏測量日記抜粋」(米子市、致遠文庫、昭和50年)
 (文化3・7・24・8・20 / 文化10・閏11・8・12・2 / 文化10・閏11・9・11・13)
- 山口県13 「伊能翁防長測量日記」(『山口県地方史研究』46、昭和56年)(文化3・4・3・6・6 / 文化8・1・20・2・8 / 文化10・10・11・11・7)
- 愛媛県14 久保高一編「伊能忠敬測量日記抄」文化五年伊予国測量日記解説」(明浜史談会、昭和57年、手書)(文化5・6・24・9・9)
- 15 「伊能忠敬測量日記」(『愛媛県史 資料編 近世 下』所収、昭和63年)(文化5・6・25・9・12)
- 徳島県・香川県・高知県・愛媛県
- 16 久保高一編「伊能忠敬測量日記」文化五年阿・土・豫・讃州分の解説」(明浜史談会、昭和58年、手書)
 (文化5・3・15・11・19)
- 福岡県17 伊東尾四郎「文化年間伊能忠敬の測量日記」(『福岡県史資料 第一輯』、昭和7年)(文化6・12・27・文化7・1・22 / 文化8・1・12・1・20 / 文化9・1・25・2・10 / 文化9・7・11・8・17 / 9・25・10・19)

大分県18 森 平太郎「伊能忠敬 九州測量日記 大分県の部」(『大

分紀行文集』所収、昭和14年) (文化6・12・27・30 / 文化7・

1・11・4・2 / 文化7・12・18 / 文化8・1・13 / 文化9・6・28・

7・11)

宮崎県19 『伊能忠敬測量日記』(宮崎県総合博物館、昭和46年 孔版)

(文化7・2・23・5・8 / 6・16・6・21 / 文化9・5・25・6・25 /

野口逸三郎氏の資料による。野口氏は佐原市伊能忠敬記念館

で筆写したようである) * 1

福岡県・大分県・宮崎県

20 原田種純・今永正樹編『伊能忠敬測量日記 福岡県の部・

大分県の部・宮崎県の部』(九州ふるさと文獻刊行会、昭和

51年) (福岡県の部 文化6・12・27 / 文化7・1・21 / 文化8・

1・12 / 文化9・1・25 / 2・9 / 3・10 / 文化9・7・11 /

8・17 / 文化9・9・25 / 10・19 大分県の部 文化7・1・22 /

4・2 / 文化7・12・18 / 文化8・1・13 / 文化9・6・28 / 7・11

／文化9・10・4・10・6 宮崎県の部 文化7・4・2・5・8

／文化9・5 晦日・6・23)

佐賀県21 『伊能忠敬測量日記』(『佐賀市史関係史料目録』所収、昭

和57年) (文化9・9・19・9・25 / 10・17・11・6 / 文化10・9・

17・9・29)

熊本県22 城後尚年「伊能忠敬の九州測量」

(『熊本史学』66・67合併号所収、平成2年) (文化7・8・15・

12・18 / 文化9・2・9・2・24 / 文化9・6・14・7・4 / 肥後国

測量分を中心に収録)

鹿児島県23 増村 宏編『伊能忠敬の鹿児島測量関係資料並に解説

鹿児島県史料集 X』(鹿児島県立図書館、昭和45年) (文化

7・5・7・9・17 / 文化9・2・26・6・5)

富山県24 「伊能忠敬越中巡行記」(『富山県史 史料編IV 近世 中

巻』所収、昭和53年) (享和3・8・1・8・7)

全 般25 『伊能忠敬 測量日記』千葉県史料 近世編(千葉県、

昭和63年) (寛政12・閏4・19 / 文化3・11・20) 「測量日記」28

冊の内、1、2、3と、「忠敬先生日記」51冊の内18迄を収

録、第1次から第5次測量迄の部分)

26 佐久間達夫『伊能忠敬の測量日記』16冊 (平成1年、

私家版、孔版) (寛政12年 / 文化12年、「測量日記」28冊を

収録。国立国会図書館・千葉県立中央図書館・佐原市立図書

館・福岡県立図書館で閲覧可能)

* 1 この解説のなかで、「しかし如何なる事情によってか判然としな

いが、「測量日記」の第十八冊、即ち文化九年の記載内容に相当する

部分が「日記」には見当たらない」とあるが、これは日記の表題が間

違つてつけられているため、調査者が文化9年の記録は無いと思つた

ためである(『伊能忠敬研究』第7号のP20、表2参照)

伊能忠敬Q&A

忠敬交友録

編集部

伊能忠敬は、初めて科学的な日本全図を作成した測量家として著名であるが、その交際の範囲は一技術者の巾を越え、江戸ルネッサンス期の多数の文化人、知名人に及んでいる。忠敬交友録と題して若干をあげる。

司馬江漢 画家。銅版画の始祖である。洋学を好み、天体および地球図に関心をもった。共通点があり忠敬と親交を結んで、お互いに見聞した事柄を交換した。第五次測量で西国一円の測量に出発する際は、会田安明と川崎まで送り一晩宿を共にしている。

大槻玄沢 蘭医。蘭学者。忠敬は新知識の吸収に熱心で蘭学にも興味をもったが、江戸暦局内に翻訳局が設けられてから、蘭学の大家との交際が増えた。玄沢との交際は深かったようである。

佐藤一斎 忠敬の墓碑銘の撰者。忠敬は佐原時代から名義上は林大学の門人であったが、江戸に住むようになってから門下の碩学との直接の交際が増えた。一斎は親しかった一人である。

会田安明 数学者。和算の関流に飽きたら

ず、最上流を起こし、数学上の論陣をはって門人を育てた。内弟子尾形啓助は会田の末子。第五次測量に下役として従った市野金助は会田の高弟である。測量の都度郊外まで送っており、第五次測量では司馬江漢と泊まり込みで川崎まで見送っている。

江川太郎左衛門英毅 有名な葦山代官江川英童の父。暦算を好み、測量の必要性を理解して、忠敬の門人となる。通信教育の往復書簡が残っている。なかに、極く内緒で伊豆の国の地図を見せて欲しいという書状がある。

近藤重蔵 北方探險者。両者ともに江戸にあるときは、屢々往来し圖書の貸借、意見の交換をしたという。情報の交換により両者共益するところが多かったようである。

間宮林蔵 蝦夷地で林蔵と忠敬は出会った。その後江戸における交際を通じて意気投合し、弟子として忠敬宅に住込みで実技を習い、蝦夷地の追加測量は間宮林蔵が引き受けて日本全図は完成した。

榎本円兵衛 (榎本武揚の父) もと箱田良助といい福山の庄屋の息子。第五次測量中に

忠敬と出会った。江戸に出て入門し、第一次九州測量から内弟子隊員として従った。日本全図完成まで作業に従事する。のち、御家人榎本家をつぎ、御勘定(旗本)に栄進した。榎本武揚は円兵衛の次男である。彼は伊能測量に従事して運を拓き、明治日本のために榎本武揚を残した。

楫取魚彦 (かとり・なひこ) 国学者。賀茂真淵の四天王の一人。伊能茂左衛門という。伊能八家の一つで、忠敬の同族である。茂左衛門家と忠敬の家である三郎右衛門家とは小野川をはさんで対面している。魚彦は忠敬より二十才ほど年長で、忠敬は江戸に出ると浜町の魚彦宅によく立寄ったという。忠敬が大業にチャレンジする気になったことに大きく影響を与えたと思う。

蜀山人 忠敬は下手な狂歌を所々で残している。これは蜀山人の影響のようである。

菅 茶山 福山の儒者。詩人。頼山陽は一時その塾頭を勤めた。茶山は九州測量の途中本陣に忠敬を訪問し談夜に至ったという。忠敬は、久保木清淵の著作を手渡している。

久保木清淵 儒者。佐原の隣村津宮の人。忠敬と親交があった。能筆なので中敬の死後、地図製作などを手伝う。

忠敬の測った富士山の高さ

佐久間 達夫

忠敬は、地図作成の資料を得るために、昼は海岸線と主な街道の距離と方位を測定し、夜は恒星の高度を観測して緯度を算出した。

距離と方位の測定には、基点をきめ、測線の前方に梵天ぼんてんを立て、二点間の距離と方位を測り、次々と繰り返してゆく方法即ち導線法を用いた。しかし、この方法では、測量を繰り返していくうちに誤差が生じてしまうので、遠望のできる山や岬、天守閣等を目印にし、交会法による測量を行い、測定値の修正をした。

伊能忠敬記念館には、このようにして測定した山や天守閣の方位が、「山島方位記六七冊」に、教えきれない程記されている。しかし、山の高さは、地図作製に必要ななかったため、日本の最高峰富士山だけが記述されている。

○ 山島方位記 (富士山の高さ抜粋)

・西倉沢村(文化八年十二月三日測定)

富士山の方位、子ね九分。直径八里九二。

地高、六度五分。正切〇一〇六五八。

直高、三四町一三間(一尺を三〇・三〇三センチとして換算する。)

三七三二・七二メートル、

・箱根宿 二八町二四間 三〇九八・一八メートル、

・三島宿 一三町五二間 二六〇三・六三メートル、

・吉原宿 三三町三三間 三六六〇・〇〇メートル、

○ 測量日記

・文化二年五月二十日、志摩国国府村海岸に出て富士山の方位を測る。

丑二五分五〇秒より丑二六分。

・文化八年十二月四日、駿河国須走村測所迄測る。止宿米山久太夫(家号大猿屋)。高村助太夫。此夜、富士山の高さも測る。

○ 仏国曆象編せきま斥妄

地形第三の一、西洋諸説の地体を論ず。「東海道の原駅、吉原駅にて、富士山の高さを測る」と、記してある。

小松藩の松茸

伊藤 栄子

伊予の小松藩には宮林という御林がある(御をつけるという事は、藩主の持物なのである)。そこでは秋になると、毎年松茸が生えており、藩では番人をつけて見張らせていた。やがて時期がきて、松茸狩りの程よい頃の知らせがくると、藩の殿様、奥方、御連枝様(高貴の人の兄弟等をいう)や、家老などの重役たちが、松茸狩りを楽しみ、時にはそのおこぼれが町奉行衆や、その配下にまで与えられた。家来の喜ぶ顔が目につかぶようである。

松茸の生え方は、その年の気候や雨量の多少で変わり、収穫は違っても、藩政日誌に松茸のとれ高が、折りにふれて書かれているのが面白い。それほど今も昔も珍重されていたのである。収穫の多い時には、塩漬けにして保存している。塩にした松茸は、参勤交替で江戸にいる殿様へ送られたものであろうか。またこれは、季節はずれになっても十分に食べられる。

さて文化五年旧曆八月二十一日、新曆でいえば十月の上旬ころ、伊能測量隊が松山地方から、測量のために今治へやってきた。さらに二十三日には小松方面へ入ってくる筈であった。藩政日誌によれば、

一行到着の前日、藩から松茸十七本を、賄い方へ料理用としてさし出してゐる。この十七本の松茸は、小松藩よりの測量隊への表敬のしるしとして、日誌にのっている。その後測量隊は仕事の都合により、二十六日に小松領の今在家村(いまざいけ)に一泊し、この附近を測量のち、西条藩の方へ移っていった。そのあと日誌を追ってみると、九月(旧暦)に入り、次第に松茸の生え方が悪くなってきたと書かれている。このことから伊能先生一行は、たまたま松茸のとれる丁度よい季節に、この地方を通つたことになる。

第一回例会に参加して(一)

「四千万歩も一歩から」

前田 幸子

六月二三日、日曜日、曇り。暑過ぎずちょうど良い天候に恵まれて私の期待の一日は始まった。昨年の暮、長年の願いが叶って佐原へ伊能忠敬記念館を訪ねた折、ふと目にとまった伊能図購入申込書が私を研究会へ導いてくれた。それ以来、私はこの日が来るのを心待ちにしていたのである。

地下鉄を門前仲町で降り、富岡八幡宮へと向かう私の心は躍っていた。忠敬先生は、測量に出立する前には必ずこの八幡宮に参拝したのだという。受付を済ませ、境内の参道に引かれた五〇メートル間隔の線の間を歩きつ戻りつして歩幅の測定をするうち、出発の時間が来た。香取神宮の元神職さんの音頭で拜殿に向い参拝。厳肅なかしわ手が響いていざ出発となった。

八幡宮の大鳥居の前から、きっちり歩数を数えながら商店街の舗道歩き出す。「御用 測量方」と書かれた旗を掲げて黙々と歩く集団に、街の人々は立ち止まり振り返る。歩数を唱えながら歩いていると

つい歩数を忘れそうになる。歩測は、非常に集中力を要する作業であることを実感する。忠敬先生は深川黒江町から浅草鳥越にある司天台までの道のりを歩測して熱心なあまり、「推歩先生」とあだ名されたという。先生が歩く姿には緯度一分の距離を正確に測ろうとする並々ならぬ執念がにじみ出ていたのに違いない。私は深川八幡宮から忠敬先生隠居跡まで一キロ足らずを歩測しただけですっかりくたびれてしまった。幸い隠居跡から先は歩測から解放され、忠敬の菩提寺であった法華院、間宮林蔵墓、松平定信墓、紀伊國屋文左衛門の墓などの史跡を巡り、最後に江戸深川資料館を見学した。館内に再現された天保十二年当時の江戸深川の街並の中にあるような錯覚をひと時味わって、第一部「忠敬の道を歩く」は終了した。

ひきつづき清澄庭園の中の「涼亭」に場所を移して第二部に入った。清澄庭園は江戸後期久世氏の下屋敷で、「伊能忠敬」を語るにはふさわしい会場。緑滴る庭園の樹々と池に映える陽光の中で第二部が始まった。まずは自己紹介。忠敬先生の人を動かす力は平成の世でも未だ健在である。九州、島根、京都など遠方からも駆けつけ、五〇名近い方が参集した。会員は実に多士済々である。各々興味深いお話をされる中で、歩くことにこだわり、塩の道一四〇キロを塩を背負ってご主人と共に歩いた、という主婦の方のお話がひときわ印象に残った。

自己紹介の後は「伊能図の子孫たち」と「鬼平と忠敬」の二つのテーマで専門的な小講演があった。一口に伊能図といってもいろいろ種類があるらしい。伊能忠敬記念館を訪れるまで伊能図に大図、中図、小図があることすら知らなかった私は、清水先生のお話を伺って、伊能図探求の奥の深さを垣間見る思いであった。また、鬼平こと長谷川平蔵と忠敬先生が実際に会ったかもしれないという想定のもとに、忠敬と彼をめぐる人々について安藤さんが古文書から引き出したお話は

新鮮で、とても面白く伺った。

続いて資料の展示では、忠敬直筆の文書や測量時に描かれた沿岸の地形図の長い長い巻物などを拝見した。巻物の長さや詳細に書き入れられた地名の文字を見て、測量の旅の水面下に隠れた労力の大きさに思いを馳せた。

「涼亭」に夕日が差し込む頃、盛り沢山の内容を消化して例会が終了した。清澄庭園を背景に記念写真を撮り、名残を惜しみつつ散会した。有志で行った二次会は、鬼平も好物だったという深川めしで乾杯。楽しい中にも充実した例会はお開きとなった。私はこの研究会でいろいろな方とご縁ができ、お話をする機会に恵まれたことを本当に幸せに思った。

しかも「伊能忠敬研究会」発足のきっかけとなったフランスの伊能図が、私が勤務する都立大学理学部に留学中のペイレさんの家の屋根裏で見つけたものだということを知り、思いがけない偶然に不思議なご縁を感じた。

忠敬先生をめぐるこれらのご縁を大切に、もっと深くしてもっと大きく広げていかれたらと思う。忠敬先生の偉大な四千万歩は、深川八幡宮からの最初の一步から始まった。「伊能忠敬研究会」の私たちの歩みはまだ始まったばかりだが、忠敬先生の測量の旅のように実り多いものとなることを願っている。

(まえだ さちこ・都立大学勤務)

第一回例会に参加して (二)

現在に生きている伊能忠敬

京都・豊島 正

第一回例会に参加して、伊能図そのものの探求に熱烈な思いのある

方と、伊能忠敬の人間性と生き方に惹かれている方がある様に思った。もちろん、両方に熱烈な想いがある方々も多いと思います。

歩測による追体験は、距離が長くなれば、それを記録する事の大変さを知りました。「伊能図探究」の合本は、資料的に貴重でNo.1から揃えていただき、感謝しております。

書簡も又、伊能忠敬の大きな心でもあると思います。解説をいただき、有難く思います。「伊能忠敬の書簡研究」も、一つの大きなテーマになると思います。測量日記の全巻と共に、みちと妙薫あての書簡は、人間性溢れる資料です。「黒江町の隠宅の位置図」「歩測・測量図」は、伊能測量の原点と感じました。

「江東区深川地域探訪」は、伊能忠敬江戸生活の環境を知る上で、手掛かりを得られそうです。「鬼平と忠敬」のお話は、組合せの意外性と、安藤さんの実証的研究のお話しぶりに感動を憶えました。

「伊能図の子孫」の清水先生のお話しは、輯製20万分図が権威づけのために、伊能忠敬の名を引き出した面もあるとのこと。沿岸部は、かなり参照されていると思います。宮板実測日本図は、貴重なものを、少々痛々しく感じました。

伊能家の書簡と絵図は貴重な資料でした。有難うございました。渡辺さんの若々しい探究心と行動力。佐久間さんの研究者としての、適確な解説にも、感銘と薫陶を受けました。

伊能中図の原寸大の和紙と麻の裏打ちによる復刻を望みます。私のテーマは、コピーで二〇〇%して、伊能図と現代の地図の地名比較をしています。

(とよしま ただし・京都市アバンティホール館長)

伊能家文書紹介 [書簡] 二

坂部貞兵衛の書簡 (二)

安藤由紀子

たとえ二百年近く前の人であっても、十三通の手紙とそれが書かれた日々の日記があれば、どんな人柄で、その時何を考えていたか分かるはずであるが、残念ながら坂部の書簡は、上司に宛てたいわば公信で、日記も公の、いたって事務的な測量日記である。それでも、書簡を読んでいると、オヤッと思う所があったとき、この二つの史料をつきあわせて見ると、紙面には現われてこない内側が見えてくる。今回は史料を読んで、彼の心の動きをたどってみよう。

史料 一

(世田谷伊能家文書)

B八八 坂部貞兵衛書簡 伊能忠敬宛「文化九年十月一日・太刀洗」

御書面拜見仕候。如貴命、今朝は、緩々得尊顔

大慶仕候。然は、其御方様、今日御測量、横大道より

林田迄も御済ニ相成り候由、下拙方、甘木ニ逗留可仕と

存候処、天気相成候ニ付、出立、只今太刀洗と申国界

迄相越し申候。扱、下拙方久留米城下、一日早く着

ニ付、其御方様無理ニ一日御縮メ、同日ニ久留米着ニも可被成

思召之由ニ候得共、決て不及其義、矢張緩々御越し

可被成候。一日御先へ着いたし、万一使者等、被差出候様

案内有之候ハ、明日勘ヶ由着之上、一同御目ニ掛り可申と

相断置候心得ニ御座候間、決て無理ニ御道張

候ては不宜候。其上此方ニは、注文の外ニ又々加増之

測量も可有之と被相考候ニ付、其御方様御縮候ては、

卸て、跡ニも可相成と奉存候間、呉々も御急キ無之

緩々御測りにて、測量ニ落之無様ニ御心付可被下候。

大切之御用向、麓略ニ相成、我々之欲徳ニのみ拘り

候ては、天命不宜候間、無理之事を御止メ、成丈ヶ測量ニ

出精之様、若イ衆へ御申含メ可被下候。猶、尊顔之上、緩々

御咄可申上候。以上

十月朔日

貞兵衛

東河先生 前

尚々呉々も久留米へ先ニ着候ても、市中ハ残し置

外ニ繕測量いたし居候間、必々御急キ無之、緩々御測り

久留米へ御着可被成候。決て御急キ御無用可被下候。

〔前略〕さて予定では、私共一行が、久留米城下へ一日早く着いてしまふので、あなた様の方で無理に一日縮めて、同じ日に久留米に入るようにしたい御意向の由ですが、決してその必要はなく、やはり

ゆっくりお測りください。

一日お先に着いて、万一、到着届けの使者を差し出すよう知らせがあれば、「明日伊能が到着の上、そろってお目に掛かりますから。」とお断りしておきますから、決して無理にお急ぎなさらぬようにしてください。その上の方には、予定の外に、追加の測量もあると思われるから、そちらでお縮めになっては、かえって遅れてしまうかもしれません。くれぐれもお急ぎなく、ゆっくりお測りになり、測量に落ちないよう気を付けてください。

大切な御用向きなので、粗略にして、我々の欲得にのみ拘っては、天命に背くことになります。無理なことはお止めになり、なるべく測量に精を出すよう、若い人達にお申し含めください。なお、お会いしてゆっくりお話し上げます。以上

十月一日

貞兵衛

東河先生 御前に

追伸 くれぐれも、久留米へ先に着きましても、市中の測量は残しておき、外のもれた分を測量しておりますから、必ず々々お急ぎなく、ゆっくりお測りになって、久留米にお着きなさいますように。決してお急ぎは御無用になさってください。』

この繰り返すと、断固たる調子は、何を意味しているのだろう。

「若イ衆へ御申含メ」とはあるが、忠敬に対する「諫め」ととれる文面である。何があったのだろうか。

測量日記によって、この後の両隊の道筋をたどって推理してみよう。十月一日、忠敬は秋月城下出発、わざわざ甘木へ寄って坂部と面談、昨夕「御用杭」をうった三奈木から始め、日田街道を東へ日田の町はずれまで測った。六日、今度は筑後川を渡って南側を川に沿って引き返し、久留米に入る前夜は、約一〇キロ手前の善導寺に泊まる。ほとんど直線的な往復である。

これに引きかえ坂部隊は、この筑後平野の中央部を行ったり来たりジグザグに測っている。この周辺には、すでに同年二月に小郡・久留米まで、七月に日田まで測量に来ているので、打ち止めの「杭」が方々にあり、それらを繋ぐ詰めめの測量をしなければならなかったからだ。

ところが仕上げの仕事は五日で終わったらしく（やっぱり一日早く済んでしまった。）翌日坂部は、伊能隊の分を手伝ったとみえ、久留

米に向かって戻ってくる伊能隊に逆行して筑後街道を測った。田主丸町泊、すぐ五里トンボ返りして、前夜は久留米から約六キロ手前の追分に泊まる。四日前には、久留米城下の入口迄測ったのに、決して中に入っていない。手紙の約束を守っているわけだ。

翌八日午後、両隊は、めでたく久留米城下で出会った。というか、出会うようにした。(1)

忠敬は、なにを心配していたのだろうか。私には、いまのところ二つの事しか思い付かない。一つは、坂部貞兵衛の役人としての格がかなり高く、しようと思えば忠敬の頭越しに、藩と接触できたのではないか。もう一つは、翌日の城下測量は大藩のことであり、両隊合同で、一つのパフォーマンスとして行いたかったのではないか。あるいは、この両方が理由かもしれない。

第一点。忠敬の祿は十人扶持、坂部のそれはまだ分からない。しかし天文方としては、ともに高橋景保手付手伝として同格である。薩摩藩の接待史料によれば、「伊能勘解由下総百姓の子にて、天文にて立身、当分御家人にて候得共、御家人より格宜しき由。坂部貞兵衛天文方に付き、与力格の由。」とある。測量日記には、各領主からの贈物の記録もあるが、「国産一同へ贈らる」といった記述が多いなかで、直前の九月十九日、佐賀の領主からの分は、現金のせいとか、「私に味噌漬のボラ一桶と金三百足、坂部へ金三百足贈らる。」とある。(2)

また、二人が高橋景保に差し出す公用書簡中、相手に言及するとき「坂部へ」「勘解由儀」などと、呼び捨てである。(3)

第二点。めずらしい御道具を携え御用を勤める天文方一行は、地方の人々にとって、驚きと畏敬的であったことは確かで、世話をした村方では、道具の写生を残した者、子に「忠敬」と名乗らせた者、藩士には弟子入りを望む者などがあつた。丹波福知山藩では、女子供の

見物を禁じたほどだ。大村藩の前藩主のように、道具をみるため、忠敬を招待した例もある。全員そろって城下を測量したい忠敬の気持ちは、もっともだと納得できるではないか。

いずれにせよ、わが坂部氏は忠敬隊長に大変気を使い、気苦労が絶えなかったのに、隊長の焦りをたしなめる事も忘れなかったのだ。

史料 二

(世田谷伊能家文書)

B 一 二坂部貞兵衛書簡 伊能忠敬宛 「文化十年三月二十一日・巻岐」

昨夜勝本より御差出之貴翰、今昼

途中にて落手、拝見仕候。然は、其御方様

昨廿一日、勝本迄御測量、今廿二日は、

郷之浦街道御測量、明廿三日は、

勝本より海辺、瀬戸浦へ向、御測量

之旨、御書面之趣、委細承知

仕候。私共義は、昨廿一日豊浦

泊りにて、今朝同所より瀬戸浦

泊りニ相越、同浦鯨納屋場迄

相済申候。明日は、右納屋場より

海辺通り相測候ニ付、御出会ニ罷成

可申と奉存候。

一、今日其御方様、郷野浦街道

之御序、国分村・国片主神社・月読

神社・国分寺等御廻り相済候哉

否承知仕度奉存候。若未夕

御済不被成候ハ、私共明後日

相越可申と奉存候。

一、前書之通り、明後日私共国分村へ相越候得は、瀬戸より勝本迄之

街道相残り候ニ付、此分は其

御方にて、御測量可被下候。式内神社

三座有之、是非可相測街道ニ

御座候。

一、瀬戸より勝本迄之街道、其御方にて

御測量と申事ニ相成候ハ、明日

海辺御出会之上、瀬戸浦へ

御越し、御止宿之方可然と奉存候。

乍併、木屋も有之、御都合悪敷

候ハ、勝本より御行戻りニても宜敷

可有御座候得共、里数承候処

凡二里半程有之由ニ御座候。

一、其御方、瀬戸浦へ御越、御止宿にて

翌日勝本迄御測量、私共は国分

通り相測候と申義ニ相成候ハ、

明日御出会之上、私共ハ豊浦へ

相戻り止宿仕候。

右之通り泊り所繰替等、有之候ニ付、

乍御面倒、今日郷野浦街道

御済之御様子、被仰聞可被下候。

御納戸にて、相待罷在候義ニ御座候。

猶、明日御出会之上、万々可申上候。以上

三月廿二日

貞兵衛

勘ヶ由様

『(前略) 一、今日そちらの隊で、郷野浦街道のお序でに、国分村・国片主神社・月読神社・国分寺などをお測りになったかどうか知りた

いと思います。もしまだお済みでなければ、私共で明後日に回らねばと存じます。

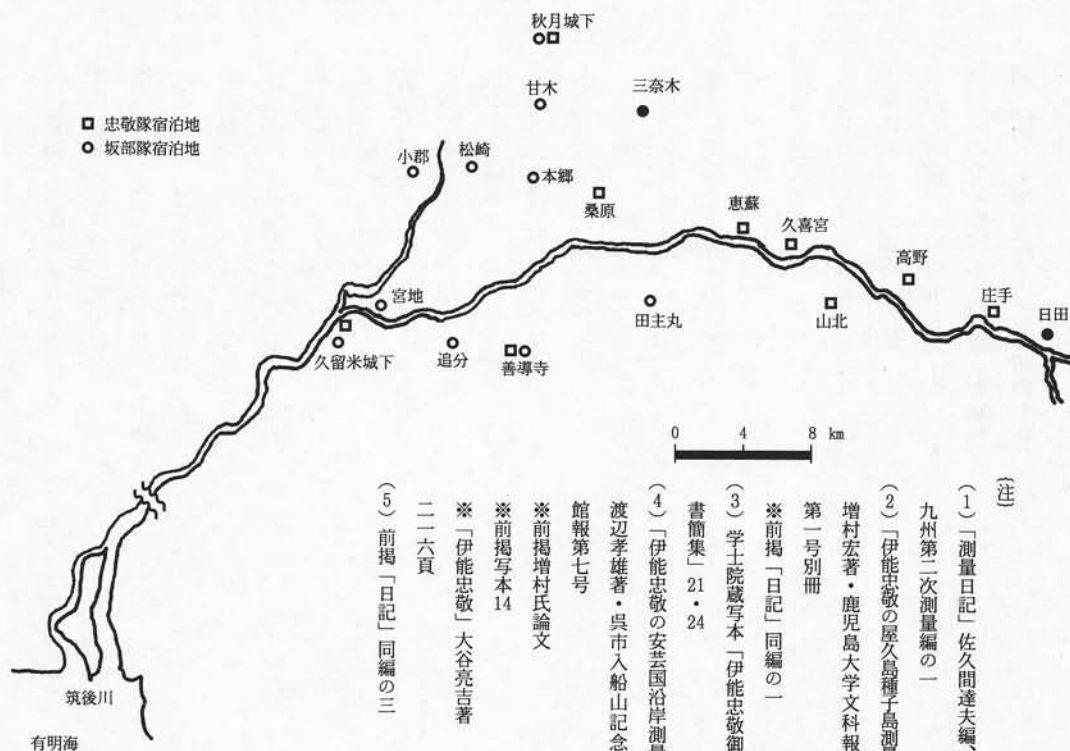
一、右に書きました通り、明後日私共が国分村へ参りますと、瀬戸から勝本迄の街道が測りもれてしまいますので、この分はそちら様で御測量なさってください。式内神社が三社もありますから、是非測るべき街道です。

一、瀬戸より勝本迄の街道お測りということになれば、明日海辺でお出会のあとは、瀬戸浦へお泊まりの方が宜しいと思います。しかし、木星の観測もあって、ご都合が悪ければ、勝本まで往復なさっても宜しいのですが、里数を聞いてみましたら、およそ二里半程もあるそうです。(後略)』

これは、老岐測量の時の手紙であるが、測量全体を視野に入れ、忠敬隊の負担を軽くするよう心掛けている様子が伺われる。こうした書簡は、小者が運んだのだろうが、情報伝達は実に細かく、行き届いている。長期間の手分けはしないという忠敬の方針は正解だった。

因みに坂部氏は、神社に興味があったらしく、坂部隊の分には、詳しい記述がめだつ。かれの死後私物整理をするとき、書籍に三日もかかったように「日記」は記している。まさかそんなに持ち歩けないと思うが、勉強家ではあったのだろう。

隊長も年老い、焦っていた。自分の主張をきちんと通しながら、この気難しい人物を八年間も支えるのは、至難の業と言っている。坂部貞兵衛が死んで、「羽翼」を失った忠敬が残されたが、測量事業のゴールは、もう手の届く所にあった。大きな仕事が成し遂げられる時には、必ず、適所に適材が配される。



(注)

- (1) 「測量日記」佐久間達夫編、九州第二次測量編の一
- (2) 「伊能忠敬の屋久島種子島測量」増村宏著・鹿児島大学文科報告第一号別冊
- ※前掲「日記」同編の一
- (3) 学士院蔵写本「伊能忠敬御用書簡集」21・24
- (4) 「伊能忠敬の安芸国沿岸測量」渡辺孝雄著・呉市入船山記念館館報第七号
- ※前掲増村氏論文
- ※前掲写本14
- ※「伊能忠敬」大谷亮吉著 二二六頁
- (5) 前掲「日記」同編の三

伊能家文書紹介 (書類二)

箱田良助の誓約書 伊能陽子

史料一 A一九七 一札之事 (世田谷伊能家文書)

一札之事

一 東海江崎及甲斐等より下西國船測事
 各州用は遠近より船者等為り申上道
 申於所用先在感々御用はるは趣
 此法在寺神妙當お動下り且又酒業
 在舟中も勿論石りたりを申上
 此の如く申上り申上申上申上申上何
 方々申上り申上申上申上申上何
 方々申上り申上申上申上申上何
 此法在寺神妙當お動下り且又酒業
 在舟中も勿論石りたりを申上
 此の如く申上り申上申上申上申上何
 方々申上り申上申上申上申上何
 方々申上り申上申上申上申上何

文化六巳歳八月

備後国安郡箱田村

箱田良助

細川園右衛門

東平 印

伊能勘解由殿

一札の事

一 良助がこの度お弟子にして頂き、西国方面の測量にお連れ下さることを感謝致します。お勤めの間は、權威を笠に着るようなことはせず規則を守り、真面目に勤務いたします。また、酒や遊びなどは勿論、不品行なことは致しません。もし、お役に立たず、お気に入らないときは、どこでも解雇して下さい。万一、旅先で病死など致しましたら、その場に葬って頂いて結構です。そのほか、何事も規則通り、注意深くお勤めすることを、お誓い致します。

文化六巳歳八月

備後国安郡箱田村

箱田良助 印

同人親

細川園右衛門 印

備中国小田郡大江村

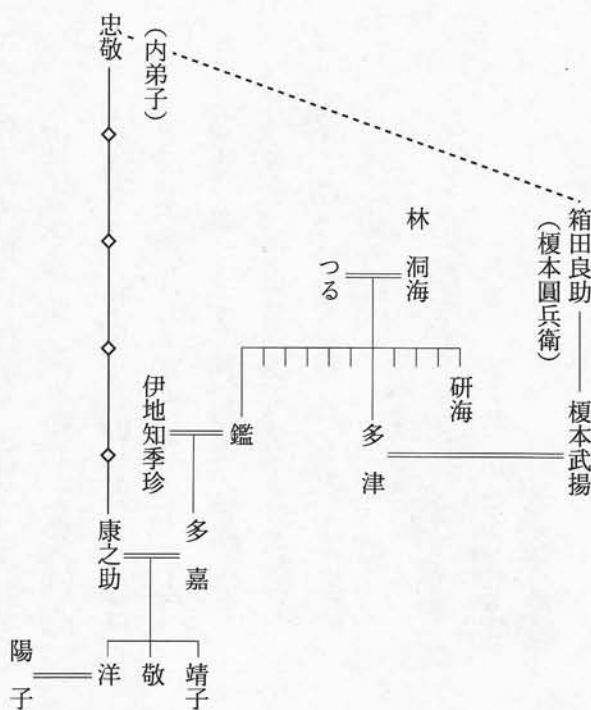
親類 谷 東平 印

伊能勘解由殿

箱田良助十九才。初めて第七次測量隊の一員として、九州へ向かう時の宣誓書である。

彼は箱田村(現在の広島県深安郡神辺町箱田)庄屋園右衛門の次男。真与、左太夫、源三郎と改名し、後に榎本家に入り圓兵衛と名乗った人であり、箱館五陵郭を占拠して新政府に抗した榎本武揚の父である。

武揚の妻多津の妹(鑑)は伊能多嘉(忠敬六代目康之助の妻)の継母、即ち私達の祖母にあたる。のちに、このような縁が出来るとは、忠敬サンも良助サンも知る由もないが、親しみを感じて、今回はこの一枚を取り上げてみた。



良助は十七才の時に兄、右忠太と江戸に出て、深川黒江町の忠敬宅で測量術などの勉強をしていた。この宣誓書は多分、父園右衛門（細川家は一時期箱田氏を名乗る）が書いたものと思う。決まり文句とはいえ、良助と共に江戸へ出た長男をすでに亡くしている父が、これから長い旅へ立つ息子の無事を願いながら、役に立たなければクビにして下さい、どこかで病死などしたら、その場で葬って下さいと書く心は、どんなであったろうか。若者が酒も飲まず、遊びもせず、ひたすら真面目に仕事をするというこの測量の旅は、文化六年八月に江戸を出てから、実に一年九カ月にも及ぶものであった。

なお、親類の谷東平（号 以燕）は数学者で、地元の測量の際には忠敬に従い、実地に測量術を学んだ人である。所蔵書簡に高等数学の

質疑応答がみられ、忠敬の手紙に天文の弟子と書かれている。

測量隊の一員になることは、現代なら、南極観測隊に参加するようなことだろうか。スペースシャトルに乗るのさえも笑顔で見送り、見送られているけれども。

宣誓書を提出したのは、勿論彼だけではない。日本学士院にある写本の中に、忠敬から高橋作左衛門へ、天文方役人（忠敬も含む）から同じく作左衛門へ、そして内弟子から忠敬へ差し出された請書の三通りが見られる。ともに文化二年第五次測量に出立の際のものである。

史料二 学士院写本（伊能忠敬書簡集）より抜粋

文化二年二月関西地方へ測量御用トシテ出張ノ際、内弟子ヨリ忠敬ニ差出シタル宣誓書

起証文之事

此度、西国筋其外国々、測量御用被成御廻浦候ニ付、私共御召連被下難有仕合奉存候。然上は、御為第一ニ相心掛、御用向大切ニ出精仕、聊無懈怠、昼夜相勤可申候事。

（中略）

一 常ニ旅宿ニテ、酒肴等差出候共、決して相用申間敷候。尤、寒気防止のため、自分ニテ調へ少々相用候義は格別、左も無之節は、酒相用申間敷候事。

一 喧嘩口論等、決して仕間敷候。たとへ如何程之存念有之候とも、遠国御用先之儀故、一和仕り、互ニ睦敷相親ミ、兄弟共相心得、少も隔意無之様、可仕事。

一 都て道中ニ於て、いかつケ間敷義、決して仕間敷候事。

一 百姓町人等より、賄賂ケ間敷儀仕候共、決して受用仕間敷候。若大名衆より贈もの有之候節は、使者ニ相預ケ、御差図請可申候事。

一 万一、金子差支、入用之儀有之候共、町人百姓は不及申、領主地頭より、右金子聊なりとも、借用仕間敷候。尤、右之節は互に借合、用立候様可仕候事。

一 領主地頭より、其所之北極高度並び東西里数、或は、一度之里数等、相尋候儀有之候はば、其大概を申聞、密数之儀は、決して他言仕間敷、惣て、術理ニ相拘り候義は、聊、他言仕間敷候事。

(後略)

『一 宿で酒を出されても、遠慮すること。ただし、寒さ凌ぎのため、自分の酒を少々飲むのは認めるが、原則として飲酒は禁止である。

一 喧嘩口論は決してしないこと。どんなに、わだかまりがあっても仕事先であるから、互いに兄弟のように仲よくすること。

一 旅の間、くれぐれも威張った態度をとらない事。

一 百姓町人などから、付け届けなどを受取らないこと。もし、大名衆から贈り物があつたら、申し出て指図を受けること。

一 万一金に困っても、百姓町人はもとより、領主地頭から僅かの金も借りてはならない。仲間同志で融通し合うように。

一 領主地頭から、測量に関することを尋ねられても、詳細なことは決して漏らしてはいけない。』

長期間にわたり、大勢の、それも身分の異なる隊員を率いて、殆ど毎日移動する。そして行く先々でのかわりも生じる。責任者としては、此のような細かい指示が必要だったのであろう。これだけの一札

をとつても、毎回のようトラブルがあつたが、秀蔵(忠敬の庶子)のように規律違反で勘当され、測量途中で追われたのもその一例であるし、九州測量中に亡くなった坂部貞兵衛の墓が福江島の宗念寺にあることを思つて読み直すと、また感慨深いものがある。

余録

忠敬は佐原時代、家業の一つとして酒造りをしていたが、酒は好きではなかつたのだろうか。それとも、仕事に障るということで弟子たちに禁じていたのだろうか。内弟子として忠敬宅に住み込んでいた箱田良助が弟にあてた手紙に「勘解由先生のお加減が悪く、長く床についておられ、一同心配しておりましたが、暖かくなってだんだん快方に向かわれ、ほつとしております。このような状態なので、家事万端私にまかせてくださっています。そして、御用が済んだ夜分など、私だけは疲れ休みの一杯をお許しただいていますが、これまで弟子たちの中で、このように扱っていた者はありません。先生に信用していただいていることを、有り難く思っております。」とある。

晴れて飲む酒、どんなに美味しかったか。良助さんの嬉しそうな顔が(どんな顔かわからないが)みえるようだ。

良助は、忠敬亡き後の地図完成に尽力し、のちに御勘定方まで出世して、七一才で亡くなった。長男勇之助が訃報を報告している手紙の中に、「林洞海と申す医師」とあるのが、次男釜次郎、後の武揚の妻多津の父である。

※箱田良助については、『古文幻想』第五号掲載、菅波寛氏の「榎本圓兵衛略伝」で勉強させていただいた。

伊能測量の地域史料

挙母城下の大庄屋鈴村家の記録(二)

編集部

前号に続ける。前号の次は坂部隊の献立であるが、既に伊藤栄子氏が紹介しているので省略し、食事の費用、人足の内訳からはじめる。

一、 銭拾九貫四百壹文 (注 三月二五日泊りの食事材料也)

内訳

- 一、 銭五百五拾文 大鯛一枚
- 一、 同九百五拾文 なよし五本
- 一、 同六百元 鱸四本
- 一、 同七百六拾四文 平目式枚
- 一、 同三百五拾文 鰹ぶし四ツ
- 一、 同式百五拾文 中椎茸五ツ
- 一、 同百五拾文 皮茸
- 一、 同三拾八文 焼塩
- 一、 同三拾式文 さかがめ
- 一、 同式百五拾文 瓜づけ
- 一、 同百廿文 蓮根
- 一、 同九拾文 丸麩
- 一、 同百四拾四文 とうふ
- 一、 同廿式文 丈山はし
- 一、 同三拾三文 水手柄杓三本
- 一、 同式百文 黒砂糖
- 一、 同七拾式文 中メ三足
- 一、 同式百三拾文 上白炭
- 一、 同百文 老マス(船)
- 一、 同百文 わらじ拾足
- 一、 銭四百五拾文 小鯛拾枚
- 一、 同式百廿四文 こち老本
- 一、 同百八拾文 いか三ツ
- 一、 同三百拾式文 玉子三拾
- 一、 同五百六拾文 あじ廿
- 一、 同百五拾文 大志いたけ拾五
- 一、 同百六拾文 干瓢
- 一、 同五拾文 菓子昆布
- 一、 同廿四文 生姜
- 一、 同五拾文 ふき
- 一、 同式百廿文 長芋
- 一、 同百五拾文 竹の子
- 一、 同拾五文 白箸
- 一、 同五百文 極上溜り
- 一、 同三百文 上茶
- 一、 同式百三拾文 白餅米三升
- 一、 同百七拾式文 多葉粉三丸
- 一、 同式百五拾文 大蠟燭拾丁
- 一、 同百廿四文 ぞうり拾足

- 一、 同拾六文 酢
- 一、 同百貳拾四文 半紙五折
- 一、 同三百八文 上直紙壹帖
- 一、 同六拾四文 半切五拾枚
- 一、 同四拾文 黒豆五合
- 一、 同六百元 上菓子
- 一、 同三百文 松葉代
- 一、 同百廿四文 小豆壹升式合
- 一、 同式百五拾文 上々醬油
- 一、 同三百五拾文 うどん粉
- 一、 同式百五拾文 老メ貳百目
- 一、 同式百文 中蠟燭廿丁
- 一、 同式百文 白みそ
- 一、 同五百九拾三文 諸白
- 一、 同拾八文 五升四合
- 一、 同式百五拾文 諸白かす
- 一、 同式百八文 明俵廿
- 一、 同式百八文 橋場入用
- 一、 同式百八文 六尺杭廿本
- 一、 同式百八文 人足三百五拾老人壹分
- 一、 同式百八文 同村
- 一、 同拾六文 三ツ葉
- 一、 同四拾五文 上杉原拾枚
- 一、 同九拾四文 中折壹帖
- 一、 同百文 灯油壹升
- 一、 同五百文 中形壹斤
- 一、 同式百文 割木代
- 一、 同六百廿四文 赤みそ
- 一、 同百廿四文 蕎麵料壹斗
- 一、 同五百文 小蠟燭廿三丁
- 一、 同百八拾八文 杉下駄八そく
- 一、 同三百拾式文 夏大根
- 一、 同廿四文 美林
- 一、 同四百八拾文 老升四合五勺
- 一、 同三貫三百 白米五斗
- 一、 同三十式文 縄七わ半
- 一、 同六拾文 岡崎買物
- 一、 同式人 此役拾人
- 一、 同五分 舞木村行
- 一、 同老人 此役貳人
- 一、 同老人 三本木村行
- 一、 同五分 見干
- 一、 同五分 殿見津村へ見干
- 一、 同老人 挙母行
- 一、 同五分 舞木村へ見干
- 一、 同式人 上伊保村諸事聞合
- 一、 同式人 挙母迄献立聞合
- 一、 同五分 同所行
- 一、 同老人 伊保村見干
- 一、 同三分 亀首村行
- 一、 同老人 同所買物行

一、同三分 郷方象御同心象
近道御案内

一、同貳人 御本陣
火の元廻

一、同老人 右御用状自番迄

一、同廿貳人 御籠分持
御道具繩引

此役四拾四人 杖拂片しき

一、馬老足 拳母迄駄荷
此役貳人

一、同老人五分 天道御小休所
へんしやう拵

一、同三人 同所
茶ばん給仕人

一、同老人 御改杭杭番
下伊保境川

一、同拾五人 はしかけ
此役三拾人 右ばん

右之通村方書出し候、御巡見杯と違不残村人用相成候段申渡

一、三月廿六日 二手共舞木村昼休、郷方
藤左衛門、御同心来助 覚兵衛差遣小奉行

又蔵、郷方代申付 問屋差出人馬差配

申談候所同村人馬繼無之

三本木村書出左の通

一、銀貳拾三匁 三本木村諸入用 (三月二六日昼の食事材料也)

一、錢拾壹匁四百五拾六文

内 訳

一、錢壹匁三百五拾文 たい三枚
大中

一、錢六百文 平目貳枚

一、同貳人 御本陣御荷物
此役四人 不寝番

一、同老人 御代官雨具持拳母行

一、同老人 御同心雨具持拳母行

一、同四拾八人 御本陣掃除
障子張料理

一、同四拾八人 障子張料理
此役九拾六人 給仕人小使

一、同老人 其外動跡片付
右馬添

一、同老人 同所掃除

一、同貳人 人足茶ばん

一、同三拾人 籠川橋掛
此役六拾人 御通行迎番共

一、同七拾六人 道作人足

一、同壹匁百 なよし七本
六拾四文

一、同五百六拾文 ためり式升五合
白みそ

一、同貳百文 とうふ五丁

一、同七拾文 とうふ五丁

一、同九拾貳文 みふ粉式丸
上茶小半斤

一、同貳百四文 竹の子(大小)六本
六文

一、同九拾文 しいたけ

一、同百五拾文 中らう

一、同貳百六拾 半紙老束
八文

一、同三拾文 白はし

一、同八拾文 わらじ拾足

一、銀七匁五分 松六分板式間半

一、銀貳匁四分 松さん拾本

一、同三分五厘 板付釘

一、同老匁八分 五寸釘老わ

一、錢三匁八百 白米五斗八升
六拾四文 老升六拾四文替

一、同三百文 割木

一、人足三百九人老分 同村

一、百五拾人 道作り人足

一、貳人 上伊保村へ両度聞合

一、拾人 岡崎買物式人行

一、六分 猿投 先觸老人行

一、老人 四郷村 人馬割

一、同百文 さば三本

一、同五百文 赤味噌

一、同百五拾文 うりづけ

一、同廿四文 酢

一、同百拾四文 のし式わ

一、同貳百三拾 三ぼう式ツ

一、同八文 木はし老わ

一、同四拾貳文 木はし老わ

一、同四拾文 ふき

一、同三百七拾 中折五帖

一、同貳拾文 障子はり

一、同六拾文 草履五束

一、同七拾貳文 中ぬき草履式足

一、銀老匁六分 松老寸貫式丁

一、銀貳匁四分 三寸釘三わ

一、同九分五厘 大六寸釘三拾本

一、同六匁 大工作料

一、錢三百文 諸白式升

一、同貳百貳拾 四文 とぼし油五合

一、六拾四人 御本陣そうじかり物
色々三十式人出人足

一、六人 平針村御泊り聞合式人

一、老人 拳母へ御先觸

一、三人分 加納・乙部・亀首
両度ツツ聞合

一、老人 拳母御本陣へ御着届

一、式人 上伊保村四郷村
見ほし人足

一、九人 御給仕六人出

一、四人 御本陣詰人足

一、四人 先拂

一、拾式人 挙母迄ぼんでん簡繩御繪凶せうき(床几)
御加筆書役人足

一、五人 明手人足

一、拾人 御本陣被仕舞かり物返済

右之通 村方書出し候入用之義御巡見杯と違被下無之旨申聞候

一、三月廿六日梅坪村通行被致、先拂等者前条之通、足助御知行所 吉

右衛門方^二 御小休茶菓子差出候由達有之

一、人足百八拾三人 梅坪村

馬式足

内 訳

一、人足九拾人 四ツ述^ら堤通
加古川迄道造

一、同式拾壹人 四郷村行

一、人足四人 馬方馬添

一、同五人 増人足

一、同式人 道通掃除人足

一、同三人 荒井村行

一、同壹人 龜首村行

一、同式人 足助行

一、代五百廿四文 御菓子代

右村方、書出し候入用等御巡見と違被下無之旨申聞候

一、右村々御通行相濟候上、御役所へ御尋申達

一、四人五分 料理方三人出

一、九人 食たき 小使
人足六人足

一、三人 廿五日夜番
廿六日火の元廻り

一、四人 ほうき人足

一、式人 御本陣亭主役

一、人足式拾四人 四郷村境^ら
四ツ述迄同断

一、馬 式足

一、同拾四人 舞木村行

一、同三人 掃除人足

一、同三人 四郷村行

一、同壹人 上伊保村行

一、同式人 御船村行

一、三月廿六日夜、御城下御泊取計
大橋理兵衛方也一式取請帳面有之

一、三月廿七日、三本木出立被致、金谷村、下林村、
長興寺村、今村御通行被致候^二付、觸書認
差出前文之通

一、金谷村 三光寺小休、寺社役中へ兼^而
掛村申遣候

一、今村、大谷、小休場、郡方^江申談諸道具
貸遣候

一、都^{スベテ}通行被致村々一同御案文之帳面
前夜泊村、差出候分写しし村^ら差出

一、右御通行無滞相濟候段向々^ら
達^二付御役所へ申達

一、四月三日 古瀬間村通行被致郷方
乙助、御同心兩人差出取計向□□郷中へ申付遣
左申上申付候

一、設案郡下津具村・坂野貞兵衛殿御人数
二分^ケ相成七日、八日兩日御通行被致
郷方藤左衛門差出 御同心
掛^二付申候様申付遣 羽をり刀差遣
無滞相濟罷帰申達

一、四月六日同郡夏焼村、并能勘解由殿通行被致郷方
喜兵太差遣掛御同心羽をり刀差候
無滞相濟罷帰申達

一、右村々 惣^而道筋間敷改 遠近
山高サ改 泊村^二快晴之夜ハ
天文測量被致候由向々^ら申達

旦又 昼泊木錢御朱印人馬 其外
是又申達 賃拂有之候由

右村々 万端無滞相濟候段
追々申達有之候由、御代官、郷方^ら
も届^二付、御役所^江委細申達

是又申達

是又申達

是又申達

是又申達

是又申達

是又申達

是又申達

是又申達

是又申達

是又申達

諸侯の依頼による地図仕立て

渡辺 一郎

諸侯等の要請により伊能グループの手で製作された伊能図がどのような経過で依頼され、どの位の礼物を払って入手されたものかについての史料は、これまで見あたらなかった。

伊能図を求めて歩いているうち、偶々平戸の松浦歴史博物館と島原氏のさかきばら郷土史料館で、伊能図の依頼と礼物について記した文書を発見したので紹介する。

平戸の文書は、松浦藩が伝えている伊能図の副書で、同図の来歴を明らかにするものである。島原市の文書は礼物の受取りと経費明細で、島原藩が伊能図を依頼し代金と引換て受取ったことが明かである。しかし残念ながら島原で伊能図は見つかっていない。

松浦史料博物館蔵伊能図八枚の副書

松浦史料博物館には、伊能大図として平戸藩領、壹岐、五島、佐世保、長崎の四舗、中図として大阪から長崎までの海路図三舗、ほかに九州のみの小図一舗を所蔵する。これらは藩主より忠敬に依頼し、内密に仕立て、死後文政五年に納められたものである。

これらの交渉は内弟子の保木中蔵が窓口となつて進められ、大図四舗と小図は当初七枚構成で、七兩位で高橋景保より納めたことが誌されている。

瀬戸内より長崎への航路図は、大変珍しいもので、保木敬蔵が自宅で極く内密に作業し五枚(現在は三舗に統合)を六兩位で仕上げていくことがわかる。意外に礼物は安かった感がある。

文化年中、公儀より日本国一円の絵図出来の儀、仰せ出され、下総国香取郡佐原村の人伊能勘解由忠敬を頭取とし、その外数人諸国相廻り、測量これあり候て、同十四年平戸に相越し測量これあり候。

此の時、神崎に於いて勘解由に御逢い遊ばされ候、其の後江戸に罷り帰り候て茂、御屋敷え度々罷出、御逢い遊ばされ候。その頃、御領地辺絵図の儀共御話し遊ばされ候ところ、極く内分にて出来指し上げ申すべき旨御約束申し上げ候。

然るところに、文政四年巳年、勘解由役宅に於いて日本総絵図成就にて、公儀え相納め候旨、依つて此方より御頼みの絵図も引続き出来、指し上げ申すべきのところ、勘解由病死仕り候。

尤も、同人弟子保木敬蔵永蒼と申す者え、右御絵図の儀、御渡し置かれ候。御直書の証拠もこれ有り候故、引続き御世話申し上げ候て、同年冬御領分中ならびに長崎之図六枚、九州一円の図一枚、都合七枚、その後同五年午六月、長

崎辺より平戸瀬戸通り大阪辺迄の海路図五枚出来、之を差し上げ候。

右、御手に入り候次第、相記し置き候様、仰せつけられ候、就いては一礼相添え置き申し候以上。

文政五年壬午七月

宮川 嘉織
奥嶋六郎大夫

一、御領分中ならびに長崎之図九州一円之図都合七枚

右は、伊能勘解由え御頼み置かれ候ところ、同人死去に付き、保木敬蔵御世話仕り、天文方御役高橋作左衛門様に沙汰に及び候て、出来致し候旨、之により右御絵図に相掛かり候向きえ御挨拶下され候、且つ又、御絵図出来入り目など、左に之を記す。

- 一、金六両三步と銀二両
- 右は、御絵図七枚 惣入り目
- 一、茶宇御袴地 一反
- 一、ていら 三斤(カステラか)

右は、高橋作左衛門様え、御絵図出来、御請取り成され候御知せとして且つ御挨拶旁々、之を遣わさる旨、御使者は宮川嘉織罷越す。

一、金五百匹
右地図出来に付き、掛かり候人数、左の八人え之を下さる。

下河辺政五郎
永井甚左衛門

川口 勝次郎
岡田 東助
門谷 清次郎
吉川 克蔵
箱田 左大夫
保木 敬蔵

- 一、金二百匹
- 一、三河内焼唐似茶碗 二
- 一、同根付け 壺

右は、下河内政五郎頭取候て、御世話仕り候に付き、別段下され候。

- 一、長崎辺より平戸瀬戸通り大阪辺迄の海路図 五枚

右は、跡にて保木敬蔵え御頼み成られ、役筋え申し越し候由の処、相後れ仕りて出来の儀、何角難しき由聞き候て、出来難き趣に付き、敬蔵極く内密に自分居室にて出来、指上げ候旨。

- 一、金五両三分式朱と銀三両
 - 右は、御絵図五枚惣入目
 - 一、金五百匹
 - 一、ていら 五斤
- 右は、保木敬蔵え御絵図格別、深切御世話仕り指上げ候に付き、之を下さる。

島原市さかきばら郷土史料館蔵

伊能測量関連文書(一)

島原藩でも伊能図の写しと測量器具等を入手したらしく、その代金の受取り他五点がある。

史料一 証文一通

覚

一 金五両
右者九州地図仕立て
手間代之内確かに請取り申し候 以上
寅九月十九日

小川仁兵衛 殿

箱田左太夫 印

箱田左太夫は、内弟子箱田良助のこと。中国測量の際忠敬と知り合い、文化四年一七才のとき出府し入門した。九州第一次測量から伊能隊に加わり最終図作成にも参加した。才能があり、のちに御家人榎本家をつぎ、旗本に累進した。榎本武揚は彼の次男である。

小川仁兵衛は島原藩士。郡方改役。島原藩が九州の地図を希望し、その内金として五両払った受取書と思われる。寅は文政元年(一八一八)で、九月というのは、忠敬死去後である。

史料二 証文一通

覚

一 金拾両二分
右者九州図仕立て諸人用残金確かに請取申し候
寅十二月二日

小川仁兵衛 殿

箱田 左太夫 印

注 同年十二月に払った残金の受取である。

史料三 証文一通

覚

- 一 金三両 小方位
- 一 同二両一分 象限儀
- 一 同二分 コンパス
- 一 同二分 厘差
- 一 同二分 厘差

右之通り確かに受取奉り候 以上

壬十一月二九日

小川仁兵衛様

大野弥三郎 印

注 壬は文化九年ではないか。伊能の紹介で求めたものと思われる。

史料四 九州地図入手費用明細

- 一 金五両 丑十二月勝手方より 御取替相渡候分。
- 一 同拾壹両二分 寅十二月右同断。
- 一 同二拾両 寅三月品口三九郎便。持参致候分。

三拾六両二分

内

五両二分二朱と四匁六分三厘

島原地図諸入目。

一両二分

右地図出来候に付挨拶として
伊能勘解由殿、金三百疋并肴

一折代金百疋箱田左太夫、金二百疋差遣候
九匁七分七厘
右地図奥村加兵衛便島原、持參致候ニ付御一箱拵代并包み御座渡紙細引綱代共

五拾四匁

右地図島原、持参いたし候人足賃

二朱

丑四月、伊能勘解由殿、時候見廻菓子一箱代。

二朱

同六月、御同人、暑氣見廻茶一箱代

二朱

同九月、御同人、時候見廻菓子一箱代。

拾三匁三分

二朱

同十二月、御同人、病氣見廻雁一羽代。

二分

寅三月、御同人、病氣見廻菓子一箱。

二朱

奥村加兵衛、地図島原、持參致候ニ付、御目録下サル。

二朱

寅六月勘解由殿、暑中見廻茶一箱代。

二朱

注 このときは、忠敬はすでに病死している。寅九月、左太夫方より呼参り候節、持參致し候鮮肴一折代。

二分二朱と

五匁七分

戌年以來度々之送物いたし候御入用御勝手方より御取替成られおり候ニ付返納致し候分。

二拾兩二分

九州地図諸入用。

二朱と
二匁五分

一分と
四匁五分

六匁二分五厘

四兩一分

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

拾枚代

右地図出来請取ニ參候節、箱田左太夫、差送候鮮肴一折代。

右地図出来の上、左太夫と出會入用。

小川仁兵衛帰られ候節、箱田左太夫、差贈候絵半切二百五疋差送候積之分共

地図出来揚り候付為挨拶伊能勘解由殿、袴地式端代金貳両、箱田左太夫、金五百疋、渡部啓次郎、金貳百疋、且勘解由殿内実は死去被致候由ニ付、追て弘有之候上、香尊金貳百疋差送候積之分共

銀九拾八匁六分五厘

此金壹兩貳分二朱と一匁壹分五厘

金ノ三拾五兩三分と三匁三分五厘

残二分二朱と六匁三分五厘

右者島原ならびに九州地図仕立方、御頼ニ付相掛候諸入用、勘定書之通に御座候 以上

地図仕立を島原藩が依頼した費用の内訳である。総額三拾六兩二分は平戸藩の支払いと較べ可成りの高額である。忠敬死没の直前に箱田左太夫が窓口となって扱い、死亡直後に引渡されている。対象となった地図は、小図又は中図の九州全図と藩領周辺の大図を合わせて数枚であったと推定される。このとき作られた伊能図の存

在は確認されていない。どこかに保管されていることを期待している。

諸候がどのような形で依頼し、どの位謝礼を払って入手したかについての史料は殆ど無いので、本史料は貴重なものである。

参考

地図を欲しい人とともに内々で見せてほしいと云う者もあったようで、葦山代官の江川英竜の父英毅が忠敬へあてた書簡がある。英毅が見せて貰ったかどうかは分からないが、見せて貰って、写すという方法もあった。

呈鄙楮候、甚寒之節益御清寧大善不断奉存候、其後彼是取紛御疎遠罷過候、御免捨可被下候、然者推歩之事先達而相伺候外ニ尚又愚意ニ兼相分候箇條別相記相伺申候、何卒御指揮奉願候、

一先年諸国之地図、官命ニ而御製被成候由、右之内ニハ豆州之地図も出来候儀と奉存候、右者御内々豆州之図計リ拜見相成間敷哉、定而官禁ニも可有之、容易ニ他見ハ不相成候へ共、極内々拜見相成候事ニ候ハ、奉願候、先者右申上度呈小楮候、以上

十二月六日

伊能先生

高梧下

佐原市教委文書85-1-3

葦山江暹 拜

高梧下

佐原市教委文書85-1-3

葦山江暹 拜

高梧下

佐原市教委文書85-1-3

葦山江暹 拜

高梧下

佐原市教委文書85-1-3

葦山江暹 拜

高梧下

佐原市教委文書85-1-3

◇連載 第六次測量日記 (三)

佐久間 達夫

阿波領の測量を終り、国境を越えて土佐の海岸沿いに室戸まで。

同十九日 朝より晴天。午前層局行書状を関権治郎に渡。九ツ後突喰浦出立。本道を行。阿州、土州

界迄 関権治郎、樋富菊郎、郡代手代四人、袖取手伝足軽十一人(姓名前出)送別。又、土州郡方下役北岡十右衛門、浦方下役宮崎竹助、甲浦庄屋橋崎快藏、年寄吉松礼助出迎、直に案内。八ツ前甲ノ浦へ着。(国界前 阿州の番所の地を突喰の古目という。日本国に有。土州の入口番所の地を甲ノ浦の東股という。又西

股あり) 止宿 本陣 浄土宗 南谷山超額寺。脇宿 日蓮宗一知常堅山万福寺。着後、郡代下役 北岡十右衛門、浦方下役 宮崎竹助、外普請方下役 広井小左衛門、浦方横目 岡本忠治郎、根来彦八、横田多良平、弘瀬龜八、外に休泊用達 沢田源助、松村土之進、同加わり樋口喜助、三木鏡四郎、勘定役松嶋忠藏等出る。其後浦方奉行森俊平出る。郡奉行同格のよし。土佐國海辺測量險難の勝をいう。此夜疊る。雲間に測。

同二十日 薄曇。朝六ツ半頃 土州安善郡甲ノ浦出立。手分。我等、下河辺、柴山、青木、稲生、甲浦止宿トより初、逆に阿州、土州の界、昨十八日測留航へ着。それより又止宿下へ引返し、順に白浜浦、河内村、生見村、相聞(野根の内) 野根浦へ八ツ後に着。着前大雨。坂部、文助、葛嶋、赤葉嶋を測。それより唐人岬、船藏ノ岬を測、八ツ半後、野根浦へ着。本陣 五郎左衛門。脇 忠三郎。此夜晴曇。雲間に

測。川内村庄屋 小川忠吾 野根浦庄屋 安岡佐近助出て案内。

同二十一日 晴天。朝六ツ半頃 野根浦出立。我等、柴山、青木、稲生、甲所より更初、佐喜浜浦迄測。止宿 本陣 井筒屋宇助、脇宿 井筒屋辰三郎。此夜晴天測量。同村庄屋 寺田八郎右衛門、同仲雄五郎。

同二十二日 晴曇。朝六ツ半頃 佐喜浜浦出立。坂部、柴山、下河辺、青木、文助、善八、同村下より初、同浦枝郷 入木村、尾崎村を控て津呂浦の内椎名村字満水、又椎名村を過、津呂浦の内三津浦まで測。我等、秀藏地凶、並 日記清書に先へ行、三津浦止宿 本陣 真言宗 皆円寺、脇宿 札之丞。此夜疊少晴。測量。

同二十三日 朝小晴。無程 曇、又小曇。六ツ半頃三津浦出立。手分。我等、下河辺、青木、稲生、津呂浦の三津浦より初、津呂浦の高岡村、それより室戸山明皇院嚴御寺の大師堂迄測る。坂部、柴山、文助、大師堂より測、津呂浦を過て室津浦迄測。止宿 本陣 真言宗新義宝珠山津照寺(四国二十五番札所 即 東寺の末寺)、脇宿 平左衛門。(室戸山明星院 嚴御寄寺は、此国日東寺、往古は 津呂を東寺村共いしよし。今は津呂の東寺という。国田百二十石 四国二十四番札所。土州一國の真言宗は、悉 新義のよし。古

義は高知城下に一寺也という。

同二十四日 未明晴。六ツ半頃より疊る。室津浦(五六百石積の湊なり) 出立。坂部、柴山、青木、稲生、文助、善八、同村より初、浮津浦、元浦(此村に西寺あり。四国二十六番の札所 竜頭山金剛頂寺。国田百石 東寺に対する西寺という。通称なれ共寺格少劣て西寺より東山へ昇をするよし)。元浦の岬を行当崎という。(即 元浦の内 行当村あり)、吉良川浦を歴て羽根浦迄測る。我等、下河辺、佐助、東寺続の山へ登て、山々を測。豪氣多して遠山遠嶋不見。測量手は八ツ後、我等、下河辺は七ツ頃に羽根浦着。止宿 代増屋忠治右衛門。同 四郎右衛門。此夜晴て測量。

同二十五日 朝より晴天。我等、柴山、青木、稲生、文助、六ツ半頃 羽根浦出立。甲所より初、同村枝郷尾僧村、奈半利浦枝郷加領郷本前、人家け入込て不見。田野浦へ八ツ後に着。止宿 本陣 岡注左衛門、脇 岡又右衛門。坂部 下河辺地凶認 先に宿へ越。此夜晴天測量。(二十三日 二十四日 二十五日 合三日) 津呂浦大庄屋 多田実右衛門、同所年寄 又右衛門、室津浦庄屋 今正九郎右衛門、同所年寄庄左衛門、浮津浦庄屋 野町彦八、同新仲同 市郎右衛門。元浦庄屋 奥宮直作、吉良川浦大庄屋 田中貞之丞、奈半利浦庄屋 高原政右衛門、同年寄喜右衛門、田野村庄屋 佐治右衛門、同浦庄屋 勝左衛門、奈半利村庄屋 土居新七、各村前後村案内。同二十六日 朝晴曇。六ツ半頃 田野浦出立。我等、柴山、下河辺、青木、稲生、佐助、同村下より初、安

田浦、唐浜浦、下山村、伊尾喜浦、それより松田鳩浦を歴て安喜浦下迄測。八ツ頃に安喜浦着。本陣 万歳屋久左衛門、脇宿 升屋幸平。下山村庄屋 庄助、安喜浦庄屋 松本新左衛門。同断 須藤長兵衛案内。

同二十七日 朝より晴天。六ツ半頃 安喜浦出立。

手分。我等、下河辺、青木、稻生、(善八病氣 代藤吉)、同村止宿下より初、安喜郡和食浦を歴て香我美郡手結浦迄測る。坂部、柴山、文助、佐助、手結浦より初、夜須村より岸本浦を歴て赤岡浦迄測。後手は八ツ頃

先手は九ツ頃に着。赤岡浦本陣 長木屋又左衛門。脇宿 長木屋次惣右衛門。此夜晴測量。手結浦庄屋 左

近右衛門、年寄 万蔵、夜須村庄屋 仲平、岸本浦庄屋 長尾喜代次案内。赤岡村大庄屋 浜五郎平同断。

同二十八日 朝より晴天。手分。坂部、柴山、文助、佐助、六ツ半頃出立。無測量にて直に高知の城下に至り、当土佐国の横切(土州長岡郡 予州宇摩郡)境 笠ヶ峯迄測んとす。我等、下河辺、稻生、藤吉、赤岡浦下より吉原村、久枝村を歴て、前浜村迄暫る。止宿 本陣 南光山真言宗正興寺。脇宿 浜田幸右衛門。此夜野方下役 馬場三八、郷方横目

杉平秀平、高知城下より来る。此夜大豊。別手 高知治。野市村庄屋 楠瀬六郎右衛門、吉原村年寄 宇平佐古郷大庄屋 嶋崎森之丞、前ノ浜村庄屋 武作、同年寄嘉右衛門。

同二十九日 朝大曇天。六ツ半後 前浜村出立。

我等、下河辺、青木、稻生、藤吉、前浜村下より初(無程小雨)、長岡郡浜改田村、十市村、仁井田村、

を歴て、種崎浦へ九ツ半頃に着。止宿 本陣 鍋屋仁作。脇 早義十左衛門。上田村庄屋 中内弁之丞、同村年寄 津田甚左衛門、下嶋村庄屋 島村克治郎、同年寄 重蔵、立田村庄屋 岡田弥三之丞、同村番頭

新助、物部村庄屋 恵左衛門、年寄 四郎右衛門、同助作、里改田村庄屋 宇賀六郎右衛門、浜改田村庄屋

林八、久枝村庄屋 茂右衛門、仁井田村庄屋 浜口喜

太右衛門、種崎浦庄屋 岩松勇蔵。此日 朝小雨に付別手高知逗留。

五月朔日 朝曇。六ツ半頃 種崎浦出立。(測者同前 以下略之)同所下より測初、浦戸向にて浦戸の渡

を測、又仁井田村へ出、五合山村(五合山竹林寺金色

教院(函山白包) 收江村是も五台山吸江寺あり。濟家宗

国印百石。臨海樓ありて風景好。呑海亭あり。国主遊

覧の所。介良村の枝郷桂嶋(即 人家並)迄測る。それより乗船、高知城下種崎町へ着。止宿 種ヶ崎町広

小路右衛門 辰巳屋伊藤、同所運池町庄屋左吉、境町庄屋悦助、水通町庄屋文治、種崎町庄屋助九郎、

浦戸町庄屋助市、細工町庄屋貞蔵、農人町庄屋常右衛門出る。浦戸庄屋弘田喜左衛門出る。坂部、柴山、

文助、左助、高知種崎町より測初、新市町運池町、山田町にて市中は終る。それより江ノ口村、助江村、

一宮村、市部田村(郡交、長岡郡中興村、当通 寺嶋村、樹分村、比江村迄測る。止宿 比江村百姓江嶋礼平。(三里十二町三十三間)

同日 朝雨見合、午前小晴。高知逗留測。予此日より持病疾にて引籠る。下河辺、青木、稻生、善八 種崎町止宿前坂部残杭より初 逆に昨日測終

介良村字桂嶋の川向、土佐郡下地村地迄暫、引返し、下地村より川を渡り湖江村の内字西ハラミ迄測、七ツ頃帰宿。此日度々小雨。別手比江村より測初(嶺石村、植野村)、入会完崎村、龜岩村、それより權若峠を過ぎ、上ヶ倉郷穴内村迄測。止宿 穴内村百姓權蔵。(二里二十二町五十一間)。

同三日 朝晴天。予病氣。六ツ半頃 下河辺、青木、稻生、善八、昨日の測終、土佐郡湖江村字西乃子より初、吾川郡横浜村、長浜村、御墨瀬村、又、長浜村と

浦戸界迄測、八ツ半後に帰宿。此日、伊藤鉄之丞、高村右馬之助(二人共郷土出役)達て難に付、病中対談。

広井小左衛門出る。御墨瀬村庄屋円右衛門、横浜村庄屋治助、五合山村庄屋寿平、介良村庄屋溝淵茂左衛門、

下知村庄屋小松平蔵、長浜村庄屋彦右衛門、湖江村庄屋前田嘉右衛門、層局より書状着。(是迄付添案内左

喜浦庄屋 寺田六郎右衛門、当城下より帰る。)別手穴内村より測初、国見峠を越、本山郷古田村、吉延村、

大石村、本山村迄測る。止宿 本山村 永瀬順治。(三里三町十二間)。

同四日 朝より雨。四ツ後より止。此夜曇。五ツ半頃より晴る。測書。別手雨天 本山村逗留。

同五日 朝より晴天。祝儀に出る者、郡方下役馬場三八、勘定役松嶋忠蔵、賄方加役樋口喜助、三木義四郎、浦方横目岡本忠治郎、普請方下役古井愛蔵、郷

方横目杉本秀平、浦方下役宮崎竹助、普請方下役広井小左衛門、浦方横目弘瀬龜八、沐浴用連松村七之

進、外に種崎町庄屋助九郎、浦戸町庄屋助市、細工町庄屋貞蔵、新市町庄屋助三郎、農人町庄屋常右衛

門、

門案内、水通町庄屋文治、蓮池町庄屋左吉、埦町庄屋悦助、各端午祝儀に出る。予持病不全快故に、悉は不為対面。別手 本山村より測初、吉野川に從ひ、

下津野村、木能津村、上関村、下関村、葛原村、川口村迄測、それより無測書にて、立川村へ越止宿。

立川村番所預り人 大庄屋元山頼右衛門。二里十八町十二間。

同六日 朝晴天。江戸層局へ当所幸便に書状一封頼。当国主より我等へ土佐艦節百、小杉原三十帖、

下役四人へ土佐艦節八十宛、小杉原二十帖宛、内弟子(秀藏、佐右衛門、文助)三人へ土佐艦節五十宛、

侍陣取三人へ金百疋宛、草履取、藤吉、銀式両、下役中四人、草履取も同断銀式宛御贈惠。御使町奉行下役備目虎之丞麻上下にて来る。此夜晴天測量。別

手 立川村止宿前より初、笹ヶ峯迄測る。此所(土州長岡郡 予州字摩郡)境なり。予州より出迎者 松平

惣城守領分大庄屋添役今村源太、矢野淳藏、上柏村庄屋文太、馬立村組頭勇助、長治郎(一里二十五町四十四間半)、右ノ若共に笹ヶ峯より川江迄村順里数承授所、

園地笹ヶ峯(一里半)、馬立村(今治領一里、新宮村(松山御預御料 今治領 二里)、半田村(今治領)一

里半川ノ江(松山御預 御料所)通斗六里という伝。三十六町一里に。しめて凡七里斗もあらんといえり。

それより立川村へ戻る。

同七日 朝晴天。六ツ半頃 高知城下出立。乗船して三日測終の長浜村と浦戸界より測初、浦戸、長浜村、

東諸木村を歴て甲殿村下迄測る。止宿 吾川郡甲殿村百姓庄平、脇 孫助 八ツ頃着。我等全快出勤。東諸

木村庄屋代堀内長平、甲殿村庄屋船藏出る。此日昔請

方下役寺田惣作入替るよし。此日浦方横目岡本鉄作初て出役。是より国界迄付添の由、高村右馬丞付添測

童を学ぶ。此夜曇天不興。別手立川村止宿前より測初、逆に川口村迄測、一

昨五日の止杭へ繋ぎ、街道測書終る。それより本山村へ越て泊。(二里二十五町三十二間半)

同八日 朝大曇天 微雨。六ツ半頃 甲殿村出立。同村下海辺より初、仁野村迄測る。大雨、並 風測

童難成、新居浦にて中食し、直に高岡郡宇佐浦へ行(又 宇佐郷浦という)止宿 本陣 福嶋峯六之丞、

脇宿 庄屋岩井善治郎。別手 未明本山村出立。国見峠権岩峠を越、タ方

高知城下へ帰着終より大雨。大難儀なり。同九日 朝晴。午前より曇る。六ツ半頃 宇佐浦止宿

下より初、逆に海岸を高岡郡新居浦を測、それより昨日測、甲殿浦、吾川郡仁野村境迄測。(仁野村新

居浦界二淀川あり。旧名、惣殿川。それより宇佐浦へ立寄り、同村

下より福嶋浦、渭の浜入会の入口迄測、井尻浦の渡幅迄測。九ツ半頃に帰宿。仁野村庄屋武田弁丞、新居

江庄屋細田源石衛門、福嶋浦本田宗平。別手高知還船。同日 曇天。朝六ツ半、(即、宇佐浦逗留)井尻

浦より初、(同浦枝浦、竜浦、竜村を測、それより浦内村字ツツラ崎迄測、八ツ後に帰宿。此日、坂部、柴山

文助、佐助、当浦へ帰着。此日、井尻浦庄屋嘉藏、竜村庄屋五右衛門、山改役岡本宗内、高石恵内村添。高

岡村庄屋下村長左衛門出る。手分。山手測へ付添踏下役土居民平、熊谷為藏、賄役別府半七、勘定役等高知へ帰る。伊藤鉄之丞来る。

同十一日 昨夜小雨。朝大曇見合。五ツ頃宇佐浦、(又、宇佐郷浦という)出立。手分。我等、下河辺、

青木、稻生、善八、福嶋浦、渭浜浦入会より初、浦内村字灰分、深浦、塩間、出見迄測る。坂部、柴山、

文助、佐助、井尻村より初、同村字津賀、浦内村字鍋島頭、家四軒、字堂浦、家二軒、字入戸、家二軒、

字白鷺、家二軒、字大崎岬、字浦八へ 人家なし。字長崎、同。字大鹿 同。)迄測。我等手は、八ツ頃、

坂部手は八ツ半後、浦之内出見着。本陣、真言宗春日山千光寺、脇 清助。此日奥浦東分村庄屋備三郎、

同 西分村庄屋嶋村平内出る。同十二日 朝少晴。此日手分。我等、下河辺、青

木、稻生、善八、六ツ半 浦内村出見出立。(坂部組同断)同所下より初、同村字三ツ松、家二軒。字

立目、家二十六軒。字榎木、家十六軒)を歴て奥浦東分村迄測。それより西分村字中ノ浦迄辻越測。坂

部、柴山、文助、佐助、浦内村字大鹿より初、字白崎 字今川内、家十六軒。字小嶋等、字福良、家十

六軒。此所に池ノ浦へ越坂あり。凡十二町、字大添家四軒、字長崎、字須ノ浦、家十二軒、迄測る。両

手共 八ツ頃着。止宿、本陣 百姓直藏、脇 忠治右衛門。

同十三日 朝曇天。六ツ半頃 奥浦東分村出立。手分。坂部、柴山、文助、善八、昨日手分の測終奥

浦西分村字中ノ浦より初、須ノ浦迄測。昨日測へ合。それより井尻浦へ越て泊。宿 百姓喜惣平。我等、下

河辺、青木、稻生、佐助、奥浦東分村入口(昨日印杭を殘置)より初、西分村を測。神田村を歴て押岡村地

を歴、又、神田村地先(此所へ印杭を残す)多野郷村より須崎浦迄横をなす。止宿、須崎浦大庄屋川洲嘉右衛門、脇宿富岡屋弥惣右衛門、但、八ッ嶺着。湊深十間。

同十四日 朝晴。六ッ半嶺 須崎浦出立。昨日神田村地先印杭より初、多野郷村、同村串野浦を測、それより大谷村枝勢井を歴て野見村人家下より大谷村堤迄測。乗船して須崎浦(又、須崎郷浦という)へ帰着。

別手・坂部、柴山、文助、善八、井ノ尻浦より乗船し、浦内村字ツツア崎より初、外海通池ノ浦を過ぎ、同村字竹ノ内迄測る。止宿野見浦枝浦久通浦、百姓弥三郎、同十五日 朝晴曇。六ッ半須崎浦出立。(此朝、伊

藤鉄之丞備る)。乗船直に大谷村昨日測留の堤へ至り測初、それより野見浦の向地を測、大谷村持の中ノ嶋、戸嶋半周宛測。(又、手分して、我等、青木乗船して中ノ嶋、戸嶋半面を概測し、神嶋を見取測す。)

下河辺、稻生、野見浦の地先、大海辺の三の山を測。八ッ後野見浦へ着。止宿、本陣竹野屋龜之丞、脇宿庄屋代 森三平。午後より夜分曇る。野見浦、久通浦庄屋代森三平。別手。(人数同前)久通浦止宿下より初、逆に奥浦西分村、東分村を測、昨日の打止

字竹ノ内迄測、久通浦へ立戻り泊。同十六日 朝晴曇。六ッ半野見浦出立。乗船して昨日測留より外海辺へ長縄引下し乗船して測。午前別手の久通浦より測書、ノソキ岬にて出立。別手久通浦止宿下より初、順に山上相測、ノソキ岬にて

逆測の別手と会測、共に乗船、九ッ前後に須崎浦着。同十七日 朝曇。四ッ嶺晴天。同所逗留地図(片

岡文三郎という者、曆学を問う。夜は曇天。久礼浦庄屋大谷鉄之丞出る。

同十八日 朝曇。六ッ半嶺須崎浦出立。手分。我等、下河辺、青木、稻生、佐介、同浦下より初(小雨)、安和浦人家下より先字田浦迄測、中食、坂部、柴山、文助、善八、字田ノ浦測初、久礼浦の内、大野村(中食)の先字鎌田迄測る。大雨になり測強して九ッ半嶺

久礼浦着。後手、我等組は安和浦より山道(即本道)を越て九ッ後久礼浦着。止宿庄屋治三郎、脇宿百姓幾三右衛門。半山郷大庄屋片岡弥四郎、下分村庄屋山崎順平、土崎町庄屋中平半四郎出る。

同十九日 朝大曇。村役人沙濱、波高測量難成というに付見合、無程、雨降出す。又止、午後沙干測量成というによつて同所逗留測。坂部、下河辺兩人は地図に残し、秀蔵は病氣、我等、柴山、青木、文助、佐助、

午食して乗船。昨日先手測強、字鎌田より初、久礼浦の内、字小草迄測。雨不絶降。七ッ前に帰宿。夜亦雨。同二十日 朝雨。止て又曇る。四ッ半嶺、久礼浦出立。坂部、下河辺地図、秀蔵病氣、三人共上ノ加江浦

の泊へ先行。我等、柴山、青木、文助、善八、乗船し久礼浦の内字小草より初、上加江浦字土浦の内本山迄測、七ッ半嶺に上加江浦へ着。本陣庄屋大谷良助、脇宿若松屋幸吉。

同二十一日 朝晴。六ッ半嶺 上加江浦出立。手分。先手坂部、柴山、文助、善八、上加江浦字加江崎より初、志和浦枝勢小矢井賀、同大矢井賀を歴て

志和本浦迄測る。後手我等、下河辺、青木、佐助、上加江浦下より逆測し、昨日測終の向村字土浦の本

山に至て合測立帰、上加江浦下より順測し、同村枝郷押岡村(家十五軒あり)を歴て加江崎にて先手の残杭へ合す。後手は九ッ半嶺、先手は八ッ嶺に志和浦へ着。止宿、本陣 脇宿宗瑞山栗師寺(上下十六人一宿)。志和浦庄屋古谷七助案内。此日同國幡多郡の郡方下役秋屋九郎内普請方下役生原弥五右衛門、郷方目今備惠助、窪田門八、山改役池田利作、坂本芳平、幡多郡測量御用中付添候趣見習に出る。

同二十二日 朝晴曇。手分。我等、下河辺、青木、稻生、佐助、志和浦下より初、同村の内小笠津、大笠津を歴て冠崎前迄測。坂部、柴山、文助、冠崎前より初、与津村の坂越迄測。後手測書済、乗船して与津浦

へ行んとす。先手尺取ざるによつて坂越より助合山通り与津浦湊口迄測、又、与津浦止宿迄測。後手は八ッ後、先手は七ッ後与津浦着。止宿庄屋渡辺凌蔵(上下十六人一宿)幡多郡普請方下役森本喜之助初て出。同郡大庄屋森佐十郎、同断伊与木郷の大庄屋間崎源左衛門出る。

同二十三日 朝曇。六ッ半前 与津浦出立。手分。後手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、同所止宿前より初、同浦脚ノ山より同所小室浜入口迄測初は小雨なりしが段々風雨強なり。海辺休小屋にて中食罷成、昨夜の止宿へ立帰て中食し、雨中、又止宿前より初、小

室浜の先手残し杭へ合測し(此浜の上に与津村あり)、それより乗船し鈴浦へ越す。先手朝六ッ嶺坂部、柴山、文助、善八、与津浦、小室浦より初、同浦の字小嶋

戸、大嶋戸を過て、同浦水谷迄測。中食、大雨にて測留、鈴浦へ八ッ嶺に着。後手は七ッ前に着。止宿幡多郡鈴浦庄屋林左衛門。別宿鈴村庄屋清助。

伊能図探究 第九号

伊能日本図探究会 渡辺 一郎

伊能図見て歩き (三)

松浦史料博物館の大・中・小図(平戸)

かねてから、西海の島平戸の松浦史料館に伊能大図があると知っていたので、夏休みを利用して思い切って訪問することとした。聞いていたのは、平戸領の大図一枚とのことであったが、行ってみると副書付きの、何処にもまけない素晴らしい伊能図八舗が所蔵されていてビックリした。松浦史料博物館の伊能図は次の八舗である。

伊能大図 平戸藩領すなわち平戸島と対岸の一部を描く一軸
(縦一三二〇、横一一五〇)

壱岐島のみの一軸(縦二二二〇、横一一四〇)

五島列島を描く一軸(縦二七〇〇、横一一五〇)

佐世保・長崎を描く一軸(縦二六九〇、横一一五〇)

伊能中図 西国海路図と題し、中図の縮尺と描図法で書かれた、

大阪から瀬戸内經由長崎までの海路両岸のみの中図。

大阪から備後 一軸(縦五九〇、横一一五〇)

広島から博多 一軸(縦五八〇、横一一五〇)

博多から長崎 一軸(縦一四九〇、横一一五〇)

伊能小図 九州のみを描く一軸(縦一三二〇、横一一四〇)

右の各図の松浦家への入手経緯および謝礼については副書があり、
積文を地域史料の部に掲げてある。平戸藩主から忠敬に依頼があり

約束されていた。忠敬の没後は内弟子の保木敬蔵に引き継がれており、その斡旋で高橋景保から文政五年に入手したとある。西国海路図(中図)は同じ扱いでは難しいので保木敬蔵が極く内密に自宅で製作して提供したと書かれている。

大図は当初七舗であったが、軸装する際統合された。(除壱岐)西国海路図(中図)は五舗であったが、軸装するとき博多から長崎の三舗は一軸に統合された。

全図共、描図・彩色ともに秀逸で美麗である。多数の伊能図を実見調査したが、最も優良なものの一つである。保存も極上で、虫・傷・退色は殆どない。針穴も全図鮮明である。副書により来歴は明白である。入手時期まで確認できる伊能図は他に見当たらない。

文政五年(一八二二)の提供であるから、最終版上呈の一年後で、最終版と同じ方法で作成されたと考えてよいだろう。今後の伊能図研究の基準となりうると思う。文字・合印等は他の伊能図と同じであるが、彩色は、西国海路図と大・小図で若干の違いがある。端的にいうと保木敬蔵が自宅で作ったという西国海路図は、色彩が東京国立博物館の中図と大変良く似ている。大・小図はほんの少し淡彩である。上呈図はどちらの調子で描かれたか分からない。筆者は以前から最終図の彩色に二系統あったのではないかと思っているが、ならべてみると違いがよくわかる。

すでに一七〇年余を経過しているのであるが時代を感じさせないのも驚きである。恐らくこれまで余り展示されることがなかったであろう。和紙に丁寧な描かれ、虫傷の防止が充分なら長期間の保存に耐えることがよく分かる。フランスで発見された中図も恐らく同様な形で時間の経過が固定されて残ったものと思う。次に図誌的な事項に若干触れる。



图1 松浦史料博物館藏 大図(長崎附近)

実測地図（大図を云う。以下略） 杵岐 杵岐島のみを描く。緑・水色は淡く描画彩色のトーンは成田山の中図・ペイレ氏中図に近い。経緯線なし。郡界は文字で表す。○○神社、ハ、Φ、樹木、田畑などの表示がある。紙の余白部分に汚れ少々あるが保存極上。

実測地図 松浦・江迎・吉井・佐世保 縦長の一幅。二舗を縦に接続したもの。上半分は平戸から佐世保、下半分は長崎半島を描く。接続部には二個の接合記号有。杵岐図の記入項目のほか領主名を朱色で○○領と記す。文字達筆、彩色華麗、保存極上。

実測地図 五島・小値賀 縦長の一幅。二舗を縦につなぐ。他図に描かれていない五島列島を描く。文字達筆、彩色華麗、保存極上。

平戸島全図 本図は平戸島を中心に対岸部分を含め平戸領全域を描いたもの。軸装に際し二舗を縦に一軸に統合されている。上下の接合部と左右に接合記号がある。平戸島・生属島の文字は南から北へ向けて書く。彩色は比較的淡彩、緑は青味が強い。彩色華麗、文字達筆、虫・傷なく保存極上。経緯線・方位線なし。紙の継目は縦一本のみ。

実測地図（大図）が文政五年に上呈された最終版伊能大図とおなじであるかどうかは、最終版の図の分割の詳細がわからないので何とも云えないが、若干描図範囲を変えている感じがする。ただ杵岐は最終図も杵岐だけ一枚であるから同じであろう。

平戸島全図は展示中であつたが、傍らにワンカラシン（杖先方位盤）、小型象限儀、デバィダがあつた。これら器具と地図の同時展示が多いところを見ると、器具も同時に譲受けることが多かったようである。

実測中図西国海路図一〜三 大阪から瀬戸内海を西へ向かうとき、

見渡せる両岸を中図により描いた西国海路図。（以下は三図共通）海路に面しない内陸部はすべて省略。方位線、経緯線なし。彩色は東京国立博物館の中図と全く同じで華麗。虫少しあるが保存完全。退色なし。地名は○○村の村の字を省略。国名・郡名・港Φ・郡界●・宿駅○・城下□・陣屋〇を記すが、天測地点☆、寺院△の表記は見当らない。

平地はピンク系の配色、水色は沿岸のみとする。第三図は三舗を統合して一軸としたもので、博多より松浦、平戸、五島を含め長崎に至る。島・半島は内陸部も描く。スペースが狭いので小形の表示記号（合印）を用いる。カシミを引いた朝鮮の山々の遠望も付記する。

瀬戸内の海路図は明治大学図書館の芦田伊人コレクションのなかに写本で所蔵されている。誰かが中図を写して作らせたものと考えていたが、本図により伊能図作成の当時から伊能グループにより製作されていたことがわかる。

伊能小図（九州地区） 九州・杵岐・対島・五島を描図範囲とする。彩色淡彩。描図丁寧で文字達筆。虫はほんの僅か。保存極上である。字体は大図と似ている。方位線、緯線有。経線なし。表示記号は国界I、郡界●、城下□、陣屋〇、宿駅○、神祠ハ、寺院△、港Φ、があるが天測位置☆はない。○○村の村の文字を省略する。他図と接続しないので接合記号はない。図中に方位を示すため方位円が一個ある。左下に地図合印だけの凡例がある。

長崎市立博物館の諸図（長崎）

長崎の平和会館内の市立博物館には大村落測量方の峰源助写の伊能図五舗を蔵する。伊能測量の際、前大村落主大村信濃守は大変関

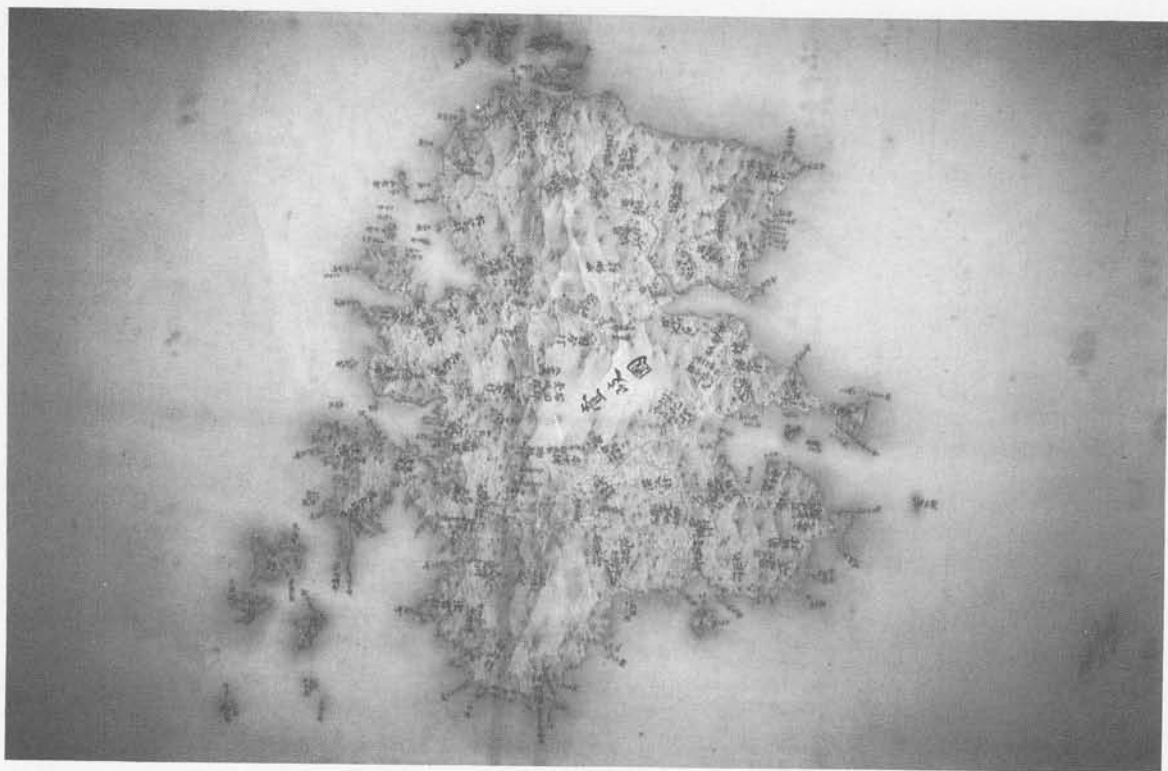


图2 松浦史料博物館蔵 大図(巻岐)

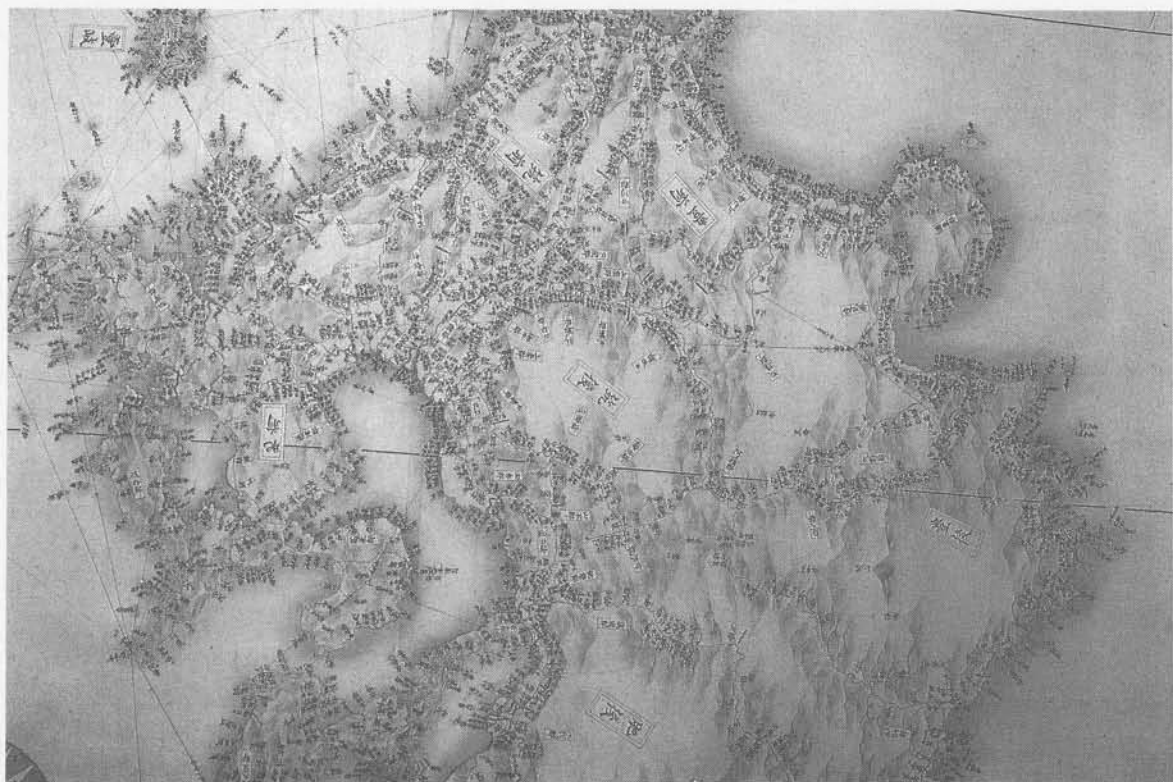


图3 松浦史料博物館蔵 九州小図(部分)



図4 松浦史料博物館蔵 西国海路図(中図)

心を持ち、忠敬に会ったという。測量日記には文化十年九月一九日彼杵駅宿泊のとき「……此夜、大村信州老候へ測量実測の儀を浜談。」と出てくる。翌日、「大村候より使者、肴下サル。」とあるが、何をどういう形で話したか分からないが、会ったことは確かである。大村候はまた藩士の子弟を江戸に送り忠敬の下に入門させている。

これらの動きと峰源助は関係がありそうな気がしたので、大村市の史料館で調べて頂いた。ところが、源助は少し時代が後で、嘉永三年に波川助左衛門(高橋景保の弟善助で、第五次の測量隊員。のちに天文方波川家をついだ)に入門し天文推歩を六年間修業したのち、帰国して大村藩の天文方を命ぜられた二五石の士であった。

写図の時期は、一部の図に江戸在府中の日付が見られる。波川家には、あるいは天文方には控図があったから、確かな原本からの写しである。各図共内容はよいものである。詳細は次号とし名称だけをあげる。

沿海地図 小図(軸装、縦二五二糎、横一四一糎)

写本であるがよいもの。描図よく、虫・傷・汚少なく保存完全。

文化六年中図(四国全図)(軸装、縦一三四糎、横一〇三糎)

写本であるがよいもの。

伊豆七島図(軸装、縦一六〇糎、横四八糎)

写本。非常に丁寧な描図で希少価値がある。

琵琶湖図(卷子本、縦五八糎、横一〇一糎)

汚れ甚だしい。文字達筆。安政二年二月峰源助写。

沿海地図 大図 松島周辺(折本、縦八九糎、横一〇五糎)

大図の部分。謹呈用図の写か。安政二年二月峰源助写。

伊能忠敬研究会入会案内

一、本会は、つぎのような活動をおこなっています。

(一) 会報の発行(当面、年四回)

『季刊 伊能忠敬研究 史料と伊能図 「伊能図探究」継承』各号三六頁。伊能図探究を継承するので、初号は第七号からとなっています。

(二) 年次大会・例会の開催

年一回の年次大会と例会を開催します。一般講演、各種の発表のほか史料、伊能図の展示説明等を併催します。

(三) その他付帯する事業。

投稿規定

● 会員の投稿を歓迎いたします。原則として一回の掲載は四頁以内とし、越える場合は分載します。原稿多数の場合、採否は編集委員にお委せねがいます。また、編集委員から一部変更をお願いする場合があります。

● 一頁は、二段組三二文字×二六行×二段で一六一二文字、三段組二〇文字×三〇行×三段で一八〇〇字です。タイトルと写真はこの中に含めてください。また、提出した原稿は必ず控えをおとり下さい。返却は致しかねます。

二、入会方法、会費等

(一) 入会申込は、住所、氏名、職業、専門、電話番号、FAX番号などを書いた申込書を左記にお送りいただくとともに、小為替または銀行送金等で年会費六千円を御送金下さい。

(二) 申込先 〒一六二 東京都新宿区下宮比町二の二八の五〇四

飯田橋ハイタウン五〇四

伊能忠敬研究会(事務局 渡辺 一郎)

(三) 送金先 東海銀行飯田橋支店 普通一〇八七五四八

伊能忠敬研究会(イノウタダタカケンキユウカイ)あて

三、本誌の編集委員はつぎの各氏にお願いしております。

安藤由紀子(元国会図書館憲政資料室)・伊能陽子(伊能家)・香取禧良(前佐原市教育委員会教育次長)・小島一仁(佐原市史編纂委員)・斉藤 仁(学習院女子短大)・佐久間達夫(元伊能記念館館長)・清水靖夫(立教高校教諭、法政大学講師)・芳賀 啓(柏書房取締役編集長)・渡辺 一郎(伊能日本図探究会代表、会社会長)(五十首順)

編集後記

● 歴史的事実について一部、早稲田大学近世史研究室高部淑子氏に指導をいただきました。

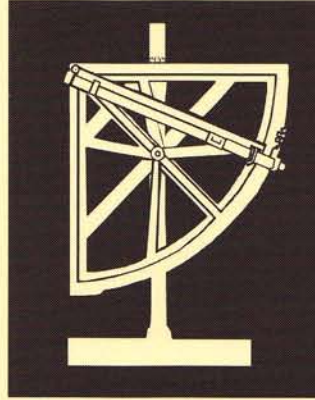
● 第一回例会は六月二三日に開催、当時の会員七四名のうち四七名の出席を得て大盛会でした。深川八幡に集合して忠敬の旅立ちにならない、元香取神宮神職の香取氏の先導で礼拝し、短区間の歩測演習をおこないました。教官は一番若い新沢君。皆、黙々と歩きました。斎藤・鶴飼・伊能(陽)氏の案内で忠敬の江戸の菩提寺、間宮林蔵の墓、松平定信の墓、江戸深川博物館等を見学の後、清澄庭園の池中に張出した涼亭で第二部を開きました。自己紹介、小講演、地図と史料の展観等盛り沢山の内容で盛り上がりました。司会の芳賀編集長に乗せられて色々なお話ができました。二次会は有志で鬼平こと長谷川平蔵も好物だったという深川めしを賞味しました。

● 会員数八月末一〇〇名となる。大台乗せに乾杯。(渡)

THE INO TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INO'S MAP AND WRITINGS

No.9 Autumn 1996



ESSAY

- The Way of Land Survey of TadatakaFUJIOKA Takeo 1
 About the Setting in Type on INO's Land Survey DiaryWATANABE Takao 3

INTRODUCTIVE NOTES

- Friends and acquaintances of TadatakaEDITORIAL Staff 7
 The Hight of Mt.Fuji Surveyed by TadatakaSAKUMA Tatsu 8
 Matsutake and TadatakaITO Eiko 8
 The Fourty Million Steps Start from the First OneMAEDA Yukiko 9
 The Impact of Tadataka on TodayTOYOSHIMA Tadashi 10

MATERIALS

Family Document

- Letter from SAKABE Teibei, 2ANDO Yukiko 11
 The Written Pledge of HAKODA RyosukeINO Yoko 15

Regional Materials

- Recode of Suzumura Family , 2EDITORIAL Staff 18
 Making Maps by the Requests of LordsWATANABE Ichiro 21

INO'S Land Survey Diary

- The Sixth Survey Diary (3)SAKUMA TATSUO 24

THE SEARCH FOR INO'S MAPS

-WATANABE Ichiro 28
 INO'S Maps in Matsuura Historical Museum28
 INO'S Maps in Nagasaki Municipal Museum 30

OTHER NEWS

-33

Edited and Published
 by
 THE INO TADATAKA SOCIETY